



改訂版

# 淡路地域ビジョン



平成 23 年 12 月

淡路地域ビジョン委員会  
淡路県民局

## 目 次

淡路地域ビジョンの改訂にあたり	3
-----------------	---

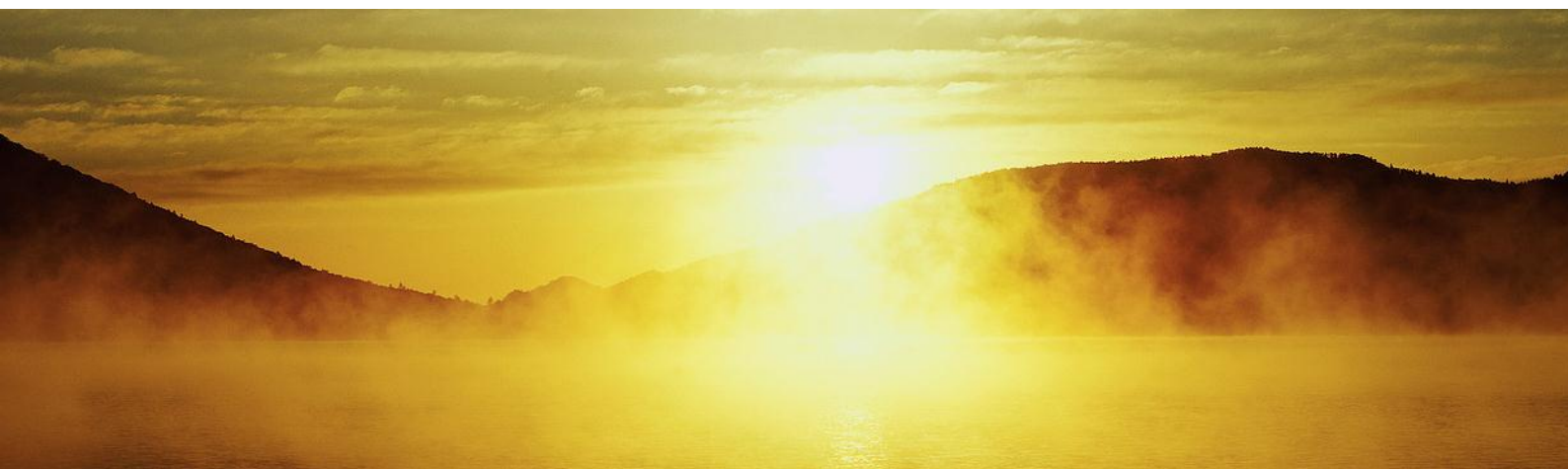
### 第 I 部 ビジョン策定から改訂までのあゆみ

第 1 章 従前ビジョンの概要	7
-----------------	---

第 2 章 ビジョン委員の活動	9
-----------------	---

第 3 章 地域づくりの取組	16
----------------	----

第 4 章 数字で見る変化	18
---------------	----



## 第Ⅱ部 新たな“国生み”をめざして（改訂ビジョン）

第1章 淡路島を取り巻く環境の変化	30
第2章 淡路島の直面する課題	34
第3章 淡路島が持つ可能性	39
第4章 淡路地域ビジョンの理念	47
理念1：命をつなぐ“持続可能な島”	
理念2：「経済」「社会」「環境」の調和がとれた新たな“幸せ社会”	
理念3：環境立島“公園島淡路”の理念の継承と発展	
第5章 淡路地域ビジョンの目標	58
1 目標	
「環境立島あわじ」～人と自然の豊かな関係をきずく“公園島”へ～	
2 実践目標と行動指針	
〈実践目標〉	
(1) 誰もが役割を持ち、地域の宝が生きる島づくり	
(2) 個性と活力にあふれ、新たな価値を生み出す島づくり	
(3) 自然とのつき合い方を再考し、その恵みに支えられた島づくり	
(4) 経済、社会、環境が調和し、命をつなぐ島づくり	
第6章 ビジョン実現のためのポイント	63
第7章 目標の指標化による検証	66



## 淡路地域ビジョンの改訂にあたり

淡路地域ビジョンが制定されたのは、2001年（平成13年）2月でした。あれから10年、「人と自然の豊かな調和をめざす環境立島“公園島淡路”」という目標を掲げ、淡路島民の進むべき方向を示してきました。

「淡路公園島構想」の先導的プロジェクトとして整備された淡路島国際公園都市や淡路景観園芸学校などを核とし、官民一体となった取組が進められた結果、「淡路公園島憲章」に掲げられているように、震災を乗り越えて花の文化を興し、淡路島を「花の島」とすることができました。

そして、淡路地域ビジョン委員会が設置されたことをきっかけに、住民自ら考え行動する「参画と協働」の取組が多面で進められ、島民の意識改革へと繋がりがつあります。

しかし、10年経った今、大きな時代の変化とともに、私たちは様々な課題に直面しています。地方は歯止めのかからない人口減少や地域コミュニティの崩壊、地域格差の拡大に苦しんでいます。日本全体を見ても、経済は閉塞感に包まれ、長い間将来に明るい展望を持っていません。世界はというと、環境・エネルギー問題、食糧問題など人類の生存・共存に対する危機が叫ばれています。また、2011年（平成23年）3月11日に起きた東日本大震災と原子力発電所の事故によって生じた経済、社会、環境全般にわたる大きな波紋は、一気に私たちの暮らしに押し寄せ、重く押しかかってきています。

こうした大きな問題は、この淡路島においても、地域のさまざまな活動に直接的、間接的に影響しているように思われます。こうした時代の変化を正確に受け止め、淡路島の未来を改めて考え直す時が来ているのではないのでしょうか。私たちの子や孫の世代にとって望ましい社会像とはどのようなものかを真剣に考えなければなりません。

実は、従前のビジョンには、すでに今の社会を見据えての方向性が示されていますが、これほど急速に今のような厳しい時代が来ることは予測を越えたものでした。今回の見直しにおいては、こうした混迷した時代を新たに切り拓いていくべく、国生みのちから宿る淡路島から日本、そして世界のあるべき姿を示す大きな気概をもって検討を進めました。

今回の改訂版の作成に当たっては、①グローバルな視点で淡路島の直面する課題を直視すること、②淡路島の歴史から見えてくる可能性を見据えること、③持続可能性をキーワードとして本当の幸せについて考えること、以上の3点に留意して見直しを行いました。

また、見直しの過程において、洲本市、南あわじ市、淡路市と兵庫県から「あわじ環境未来島構想」の提案が行われました。ここ淡路島から、「エネルギーの持続」、「食と農の持続」、「暮らしの持続」をキーワードとして、「経済」、「社会」、「環境」の三つの要素を総合的に見た“本当の幸せ”を実現すべく、新しい「あわじスタイ

ル」の地域経済・生活モデルを提案しようとするものです。これは、私たちのビジョンと軌を一にしており、ビジョン改訂作業と、この構想内容の具体化作業を連携して進めることにより、内容の整合性を図るとともに、同構想をビジョン実現の強力なツールとして位置づけました。

淡路地域ビジョンは、この島に住む私たちが、淡路島のあるべき姿とその実現のため、力を合わせて共に歩む道筋を示す、未来へのシナリオです。

そして、ビジョンは時代が移る中で、私たちの暮らしの中において常に見直され深化させていくべきものです。いつの時代においても、私たちの地域のグランドデザインは、そこに住む私たち自身で考えていかなければならないという自覚を持って、ビジョンの浸透を図るとともに、不断の見直しを行ってまいります。

最後に、2年間にわたる今回の改訂作業において、多くの島民の方々や様々な分野の専門家の皆様から大変貴重なご意見、ご提案をいただきました。その一つひとつを大切に生かしながら、この度の改訂版を作成しました。ご協力いただいた皆様に心からお礼を申し上げます。

## 1 淡路地域ビジョンとは

従来 of 行政主導型の「計画」ではなく、住民自らが描き、その実現を目指そうとする「淡路地域の将来像」です。住民、企業、行政等、淡路地域のすべての主体が共有する「地域の夢」です。

区分	従前ビジョン	改訂ビジョン
策定年月	2001年2月(平成13年)	2011年12月(平成23年)
展望年次	2030年(平成42年)頃	2040年(平成52年)頃
想定年次	2015年(平成27年)頃	2025年(平成37年)頃

\* 展望年次：将来の姿を考えるために見通しておく時期

\* 想定年次：ビジョンの実現をめざす時期

## 2 淡路地域ビジョン委員会とは

地域ビジョン委員で構成され、ビジョンのフォローアップやビジョン活動のとりまとめを行う機関です。

## 3 地域ビジョン委員とは

公募によって募集し、主に次のような活動を行います。

- ・ ビジョン活動(地域づくり活動)のプランの作成と実践
- ・ 淡路地域ビジョン委員会への参画
- ・ 淡路地域ビジョンの普及啓発活動

# 淡路地域ビジョン 全体概要

## 第Ⅰ部 ビジョン策定から改訂までのあゆみ

### 1 従前のビジョンの概要

#### 〈目標〉

人と自然の豊かな調和をめざす環境立島「公園島淡路」

#### 〈実践目標及び行動指針〉

- ①花いっぱい美しい島、②文化が広がる島、③人をはぐくむ島、④魅力ある産業を興す島
- ⑤安全で安心な島、⑥心あふれる交流の島

### 2 ビジョン委員の活動

### 3 地域づくりの取組

### 4 数字で見る変化

- (経済) 総生産額の減少、一人当たり市町民所得の減少、(社会) 急速な人口減少・高齢化、(環境) 製造業不振を主因とした温室効果ガスの削減、環境意識の高まり

## 第Ⅱ部 新たな“国生み”をめざして(改訂ビジョン)

### ■ 1 淡路島を取り巻く環境の変化

#### (1) 世界の現状と課題

- ①地球環境の危機、②資源枯渇の可能性、③経済破綻の可能性、④社会崩壊の可能性

#### 〈危機をもたらしたもの〉

- ①大量の化石燃料消費、②経済的利益偏重の市場原理主義

#### (2) 日本の現状と課題

- (経済) 成長の停滞、地方経済の衰退、(社会) 人口減少・少子高齢化、第1次産業の担い手不足、地域社会の歴史、文化、伝統の喪失 (環境) 地球温暖化、生物多様性の喪失、自然災害

### ■ 2 淡路島の直面する課題

- (経済) ①地域経済の縮小、②若者の流出、③地域産業の課題(瓦産業の不振、農漁業の生産量減少と後継者不足、宿泊観光客の伸び悩み、健康福祉や環境関連の需給のミスマッチ等)
- (社会) ①都市機能の低下、②空間管理の荒廃、③コミュニティの維持困難、④学校の小規模化、⑤少子高齢化(一人暮らし高齢者の増加、家庭の育児力の低下、労働者不足、伝統芸能の後継者不足等)、⑥交通基盤(高額な高速道路料金、島内路線バス・海上交通の縮小)
- (環境) ①地球温暖化、②生態系の危機、③資源枯渇、④淡路らしい景観の喪失、⑤自然災害

### ■ 3 淡路島が持つ可能性

一稽古照今(古を稽えて、今を照らす) —

#### (1) 淡路島が担うべき役割

- 古事記序文にある「稽古照今」は、古き時代を顧みて、現代の足りないところを補い学ぶこと
- ①他地域にない「国のはじまりは淡路島」という古き歴史に立ち返り、国の基本的な方向を見直す
- ②“地域の物語”を掘り起こし、振り返り、そこに住む人々の行動に今後の規範を探る

#### (2) 淡路島の歴史から見えてくる未来

- 「淡路の海上交通と道路」海上交通を見直し、淡路島を関西の交通の要とする
- 「御食国「淡路島」」淡路島を食の拠点とし、第1次産業を軸として社会全体を見直す
- 「淡路島のエネルギー」山林資源活用の歴史を生かしたバイオマスエネルギーを復権させる
- 「淡路島の技術」先進的技術導入の歴史を生かし、地域適正技術を生かした産業を創出する
- 「水不足と水資源管理」乏しい水資源を分配管理した歴史を生かし「島内の水循環」をつくる
- 「山岳信仰からみえる自然との共生」自然の恵みの有限性を踏まえ「自然環境の容量」を考える
- 「鎮守の森と文化・伝統芸能」「人格形成」や「集落の活力」を生み出す集落統合の場を作る
- 「淡路島の人口の推移」自然の恵みを引き出す淡路島の風土と文化が脚光を浴びる

### ■ 4 淡路地域ビジョンの理念

#### 〈3つの理念〉

##### 1 命をつなぐ“持続可能な島”

命には、時代を超え、世代を超える“縦のつながり”と、あらゆる生き物との“横のつながり”の2つがあり、こうしたつながりを大切に持続可能な社会を実現する。

##### 2 「経済」「社会」「環境」の調和がとれた新たな“幸せ社会”

経済、社会、環境の調和を大切に価値観を共有し、子どもたちがやりがいのある仕事に希望を見だし、幸せを実感できる社会を実現する。

##### 3 環境立島“公園島淡路”の理念の継承と発展

人と自然の新たな関係を作り出す精神(文化)の確立と科学技術の開発と導入による地域社会の再創造を目指す「環境立島“公園島淡路”」の理念の継承と発展をめざす。

### ■ 5-1 淡路地域ビジョンの目標

#### 環境立島あわじ

～人と自然の豊かな関係をきざく“公園島”へ～

### ■ 5-2 4つの実践目標

#### 実践目標1 誰もが役割を持ち、地域の宝が生きる島づくり

地域における「参画と協働」を進め、地域の担い手、ビジネスリーダー、オピニオンリーダーなど、淡路島の未来を託せる人材を育てる。

それぞれが持つ「知恵」、「技術」、「個性」、「郷土への誇り」を活かし、すべての人々に役割や居場所があり、生涯現役で暮らせる島を目指す。また、家庭や地域で、一人ひとりが大切にされ、互いに助け合い、支え合って生きていることが実感でき、「自助」、「共助」、「公助」のバランスがとれた島を目指す。

#### 実践目標2 個性と活力にあふれ、新たな価値を生み出す島づくり

淡路島の歴史や文化に育まれた地域資源を生かし、地域内外との連携をとりながら、新たな価値観と豊かな発想で付加価値の高い産業を生み出す。

若者が就労できる機会を増やし、自らが自分に合う働き方(生き方)を見だし、適正規模で一人ひとりが生きていける小さな生業を興すという主体的な行動を支援する。

地産地消など、できるだけ地域内で消費し、淡路島から外部に過大に流出している富を内部に循環する仕組みづくりを進め、地域経済の自立を目指す。

#### 実践目標3 自然とのつき合い方を再考し、その恵みに支えられた島づくり

自然への畏敬の念や命のつながりを自覚するとともに、過去の災害の教訓を深く記憶にとどめ、これからの生き方、暮らし方に生かしていく。

自然に恵まれた淡路島の価値を生かした地域づくりを進め、グリーン経済を振興するとともに、環境を生業とする「グリーンカラー」と呼ばれる人材を生み出し、育てる。

自らの「命」を支える豊かな自然の価値を認め、次世代へ伝えるために、多様な生態系を社会的、経済的、さらにはスピリチュアルな視点から評価した上で、地域適正技術の活用により、人と自然が協働することで、新たな共生空間の形成をめざす。

#### 実践目標4 経済、社会、環境が調和し、命をつなぐ島づくり

経済、社会、環境の調和について関心を持ち、真の幸せ(豊かさ)が実感できる、淡路島らしい暮らしを実現するための「仕組み」をつくる。

ビジョンの実践過程とその成果を、“新たな国生み神話”として島内外や世界に広く発信し、外部からの意見などを取り入れ、次のステップに生かす。

### ■ 6 ビジョン実現のためのポイント

- ① ビジョンの普及と共感
- ② あらゆる主体の参画
- ③ 行動や事業に応じた適切な協働と役割分担
- ④ 実現を支援する「仕組み」の構築
- ⑤ 的確なフォローアップ(評価、見直し等)

### ■ 7 目標の指標化による検証

- 「幸せ指標」の設定と活用
- ① 経済、社会、環境の豊かさを総合して「幸せ」を定義
- ② 各分野の総合指標として「幸せ指標」の設定を目指す
- ③ 3つの側面ごとに地域社会の状況を把握し、ビジョンをフォローアップ

### 目標を達成するための行動指針

#### 実践目標1：誰もが役割を持ち、地域の宝が生きる島づくり

(教育・文化)	・精神的にも体力的にもたくましく、個性輝き、命のつながりを大切に子どもたちを育てます。 ・地域の人、モノ、自然、歴史を学習し、それらを活用します。 ・伝統的な文化を継承、発展させます。 ・芸術を振興し、新たな文化を創造します。 ・生涯学習・生涯スポーツを推進します。 ・災害の記憶や記録を継承し、災害に強い地域社会を構築します。
(健康・福祉)	・年代層に応じた健康を増進する取組を進めます。 ・子育てを地域で支援できる仕組みなど、安心して出産し、子育てのできる環境を整えます。 ・一人暮らしの高齢者や過疎地域でも、安心して暮らせる医療・福祉システムを構築します。 ・高齢者や障害者などの事情に対応し、男女の別なく、誰もが個人として尊重され、生きがいを持てる柔軟な就労機会や社会参加の機会を増やします。
(まちづくり・地域づくり)	・花とみどりにあふれ、淡路島らしい優れた景観やアメニティの豊かな地域空間を創造します。 ・全島一斉清掃や漂着ゴミの清掃作業を推進し、ゴミのない美しいまちを作ります。 ・誰もが安全で安心して暮らせるまちづくりを進めます。 ・交通弱者に優しく、環境負荷の少ない地域交通をつくります。 ・孤立せず、繋がりのある生活を可能にするコミュニティや住環境をつくります。 ・ボランティア活動、地域づくり活動を促進し、社会的企業を育成します。 ・異文化交流を積極的に行い、異文化理解を促進します。

#### 実践目標2：個性と活力にあふれ、新たな価値を生み出す島づくり

(地域の経済循環)	・物品やサービスの地産地消の取組を進め、地域経済の循環と産業の競争力向上を図ります。
(既存産業の振興)	・多様な形態の農漁業への就労について検討し、新規就業者を積極的に受け入れる仕組みを作るとともに、新しい農と食の展開に向けて人材育成に取り組みます。 ・食のブランド化の取組を進めるとともに、地域の食材と文化を生かした「食の文化」を創造し、発信します。 ・農林水産業の6次産業化や食と農を生かした国際的な交流拠点づくりを進めることにより地域産業を振興します。 ・地場産業を再評価し、新しい時代に適合した展開を図ります。 ・地域に適合した新しい技術を積極的に導入し、地域産業の競争力を高めます。 ・おもてなしの心を持って、国内外の旅客の受入態勢や交流基盤を整え、観光客や国際会議の誘致を進めます。 ・都市住民との交流やグリーンツーリズムを促進します。 ・スローライフな田舎暮らし、淡路島らしい自然と共生する暮らしを提案し、定住・交流人口の増大をめざします。
(新産業の創造)	・地域内外の連携による創造的な取組を促進し、新産業の育成を行います。 ・環境配慮型企業や農業関連企業を積極的に育成、誘致します。

#### 実践目標3：自然とのつき合い方を再考し、その恵みに支えられた島づくり

(人と自然)	・自然への畏敬の念や命の循環を学ぶ機会をつくります。 ・住民や企業による自然の保護・再生活動を推進します。 ・「環境立島淡路」島民会議により推進されている島民運動に積極的に参加します。 ・外来種の駆除、自生種による緑花活動、放置竹林や里山・里海の整備など生態系の多様性を保全する取組を進めます。 ・過去の教訓を生かし、ハードとソフトが一体となった防災・減災の地域づくりを促進します。
(エネルギー・資源)	・エネルギー自給と自治を目指して地域内生産を促進します。 ・エネルギー消費構造の変革を進め、積極的に低炭素化を推進します。 ・ごみの減量と資源循環を進めます。
(自然の恵みと生業)	・自然の恵み(生態系サービス)を賢く使う取組を進めます。 ・自然、歴史、生活、文化に育まれた淡路島らしい景観を、新たな技術を導入して守り育てます。 ・新たな地域適正技術を研究し、淡路島の自然素材や伝統技術を元に生業(なりわい)を生み出します。

#### 実践目標4：経済、社会、環境が調和し、命をつなぐ島づくり

(学ぶ)	・経済、社会、環境の調和について、暮らしの中で意識し、学び、ともに考える機会を増やします。
(つくる)	・地域の自然や文化に適合し、環境に優しく、淡路島らしい暮らしを実現するための制度や仕組みを生み出します。 ・淡路島と同様のビジョンを持つ国内外の地域と、国際的なネットワークをつくります。
(発信する)	・ビジョンの取組をフォローアップし、実践過程や成果を国内外に発信します。

# 第 I 部 ビジョン策定から改訂までのあゆみ

第 1 章 従前ビジョンの概要

第 2 章 ビジョン委員の活動

第 3 章 地域づくりの取組

第 4 章 数字で見る変化



淡路地域ビジョン改訂版

# 第 I 部 ビジョン策定から改訂までのあゆみ

## 第 1 章 従前ビジョンの概要

淡路地域ビジョンは、「近き人喜べば遠き人来る」島づくりを象徴理念に、2001 年（平成 13 年）2 月に策定されました。想定年次は、2030 年（平成 42 年）ごろを展望しつつ、人口減少がはじまり、本格的な少子・超高齢社会に移行すると考えられる「2010 年（平成 22 年）～2015 年（平成 27 年）ごろ」となっています。

### 〈理 念〉

- ① 人と環境とのかかわりについての新たな選択  
淡路島が「人と自然の関係性の再構築」のモデル地域となる選択を行う。
- ② 内発的発展と独自の尺度づくり  
地域社会が固有に持っている経済力や文化を活かし、地域自らの考えや価値観に基づいて、地域の発展をめざす。
- ③ 淡路の持てるもの、仕組みの読み替え  
住民が淡路島の本当の素晴らしさを再認識し、地域づくりに参画する。

目標、実践目標及び行動指針については、次のとおりです。

### 1 目 標

人と自然の豊かな調和をめざす環境立島「公園島淡路」

### 2 実践目標及び行動指針

#### (1) 花いっぱい美しい島

- ① 四季を通じて花があふれる島をつくろう
- ② 美しい景観をつくろう
- ③ ゴミのない島をつくろう
- ④ きれいな水辺をつくろう
- ⑤ 自然と共生し循環性を向上させよう
- ⑥ 淡路花博の理念を継承しよう

#### (2) 文化が広がる島

- ① 伝統文化を継承しよう
- ② 新たな文化を興そう
- ③ 歴史を活かそう



### (3) 人をはぐくむ島

- ① 自然や地域に学ぼう
- ② たくましい子どもをはぐくもう
- ③ 人材を育てよう
- ④ 世界に学ぼう

### (4) 魅力ある産業を興す島

- ① 特色ある地域産業を振興しよう
- ② 新しい産業を興そう
- ③ 島内流通のシステム化を図ろう

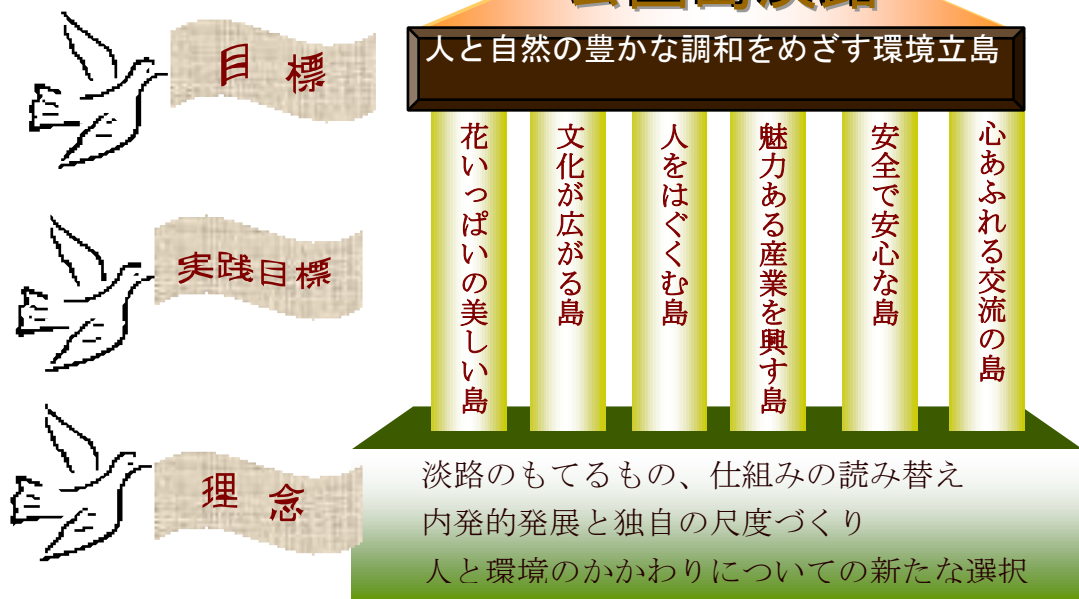
### (5) 安全で安心な島

- ① 阪神・淡路大震災の教訓を活かそう
- ② 自治会活動を活性化しよう
- ③ 健康な暮らしを実現しよう
- ④ 元気な高齢者が活躍する場をつくろう
- ⑤ 少子・高齢化社会に対応した生活基盤を整備しよう

### (6) 心あふれる交流の島

- ① 地域情報を発信しよう
- ② 交流施設を活用しよう
- ③ 交流の機会をつくろう
- ④ もてなしの心を育てよう
- ⑤ 交流の基盤をつくろう

## 淡路地域ビジョンのイメージ



## 第2章 ビジョン委員の活動

ビジョンの実現のため、官民協働のシンボルプロジェクトとして「淡路まるごとミュージアム」を推進したほか、県民行動プログラムの総合的推進として、①淡路島フェスティバル～エンデ・ワールド、②あわじのマップづくり、③あなたがつくるプログラム、④地域情報の発掘・発信、⑤おもっしょい淡路島ひろめ隊の各事業を推進しました。そして6つの実践目標ごとに県民行動プログラムを定め、その実現に向けた取組を地域ビジョン委員中心に推進しました。その内容と成果は以下のとおりです。

### (評価区分についての説明)

地域ビジョン策定時と比べて実現されているかどうかについてアンケートを行った結果

肯定的回答 「実現されてきている」及び「どちらかといえば実現されてきている」

中立的回答 「どちらともいえない」

否定的回答 「どちらかといえば実現されていない」及び「実現されていない」

### 1 花いっぱい美しい島

あわじ菜の花エコプロジェクトなどの環境保全に関する取組や‘花づくり・まちづくりの交流’など地域美化に関する取組を実施しました。実践目標の中で最も成果が上がったという評価が多くなりました。

#### (1) 取組(県民行動プログラム)

- ・ 花づくり・まちづくりの交流
- ・ あわじ菜の花エコプロジェクト
- ・ わかりやすく、美しい案内標識を目指す調査隊
- ・ 海洋ゴミの処理システムの確立と回収作業の実施
- ・ どんぐり植樹大作戦
- ・ 地球温暖化防止(6%削減淡路島づくり)
- ・ 里山の環境保全

#### (2) 評価(ビジョン委員アンケート結果) ◎

区分	全回答に占める割合	無回答を除いた割合
肯定的回答	47.8%	80.8%
中立的回答	6.1%	10.3%
否定的回答	5.3%	8.9%

#### 環境立島宝島グループ

淡路島内で増加している放置竹林を整備し、有効利用するきっかけとして、竹のチップを敷き詰めて整備したドームのような竹林音楽ホールでコンサートを開催しました。



思わず踊りだすメンバー



竹林と共鳴する心地よい音楽

## 2 文化が広がる島

‘私たちが伝える国生み神話’や‘「食の宝島」大作戦’など地域の文化を育む取組を実施しました。2番目に成果が上がったという評価が多くなりました。

### (1) 取組（県民行動プログラム）

- ・ まちづくりスポーツ・文化活動参加運動
- ・ 私たちが伝える国生み神話
- ・ 「食の宝島」大作戦

### (2) 評価（ビジョン委員アンケート結果） ○

区分	全回答に占める割合	無回答を除いた割合
肯定的回答	26.5%	46.7%
中立的回答	25.8%	45.4%
否定的回答	4.5%	7.9%

#### 食のゆりかごグループ 環境立島宝島グループ

コミュニティビジネス先導的取組を行っている徳島県上勝町の「彩事業（葉っぱビジネス）」を学習する研修会を開催しました。



出荷作業の説明を受ける参加者



木質バイオマスチップボイラーやアマゴの養殖についても勉強しました

### 3 人をはぐくむ島

‘障害者と社会交流’や‘絵本が紡ぐ親子の絆’など教育に関する取組を実施しました。成果については、肯定的な評価と否定的な評価が同じような割合になっています。

#### (1) 取組（県民行動プログラム）

- ・ 地域でつくる自然ふれあい「手づくり」公園
- ・ 子どもたちへの環境教育の充実
- ・ 淡路島「地域学習」の推進
- ・ 地域交流センター（仮称）の設置・運営
- ・ 子どもたちへの夢教育
- ・ 障害者と社会交流
- ・ 絵本が紡ぐ親子の絆
- ・ 多世代交流このゆびと一まれ

#### (2) 評価（ビジョン委員アンケート結果） △

区分	全回答に占める割合	無回答を除いた割合
肯定的回答	12.8%	21.4%
中立的回答	31.8%	53.2%
否定的回答	15.1%	25.3%

#### ええもんみつけ隊

富山県の「このゆびと一まれ」の存在を知り、見学に行き、淡路の「このゆびと一まれ」の存在を知りました。設立者3名を迎え交流会が開催されました。



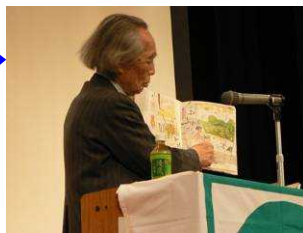
このゆびと一まれ淡路  
設立者のみなさま



活動に対する熱い思いを語り合う参加者

#### “紙ふうせん”グループ

絵本作家・講演会開催  
「この本だいすきの会淡路支部」の代表、小松崎進さん、絵本作家の梅田俊作さん、宮西達也さんが、絵本や子どもたちへの熱い思いと大切さを語ってくださいました。



絵本を用いた講演



似顔絵つきのサイン



腕人形を用いた講演

#### 4 魅力ある産業を興す島

主に農業振興に係る取組を実施しました。成果が上がっているという評価は非常に少なくなりました。

##### (1) 取組（県民行動プログラム）

- ・ 安全安心な農水産物の生産とブランド化の推進
- ・ 定年帰農者の就農支援（脱サラ帰農者島民運動）
- ・ 資源循環型農業の推進
- ・ 淡路島の多彩な魅力の情報発信による地域産業の活性化
- ・ 安全・安心な農産物の生産と食育の推進
- ・ 担い手対策の推進

##### (2) 評価（ビジョン委員アンケート結果）×

区分	全回答に占める割合	無回答を除いた割合
肯定的回答	9.8%	6.0%
中立的回答	23.5%	38.3%
否定的回答	28.1%	45.8%

#### 地域づくり交流会

神戸市中央区のミント神戸で淡路市役所の方々と一緒に「淡路で暮らさんか！！」相談会を実施しました。淡路島にもっと関心を持っていただけるよう、イベント企画中！



様々な相談をお受けしました



相談会場

#### 元気な農林水産業推進グループ

後継者の育成に成功している農業経営体の調査を行うため、岡山県の（有）中央牧場を視察しました。



親の姿を見て育った後継者の作業を見学



アスパラガス農場

## 5 安全で安心な島

福祉、健康、防災に関する取組を実施しました。成果が上がっているという評価は、3番目に多くなりました。

### (1) 取組（県民行動プログラム）

- ・ まちぐるみやさしいまちを知ろう調べようプラン
- ・ お気軽送迎この指とまれ事業
- ・ みんなで健康食生活
- ・ まちぐるみスポーツ・文化活動参加運動（再掲）
- ・ 既存道路を生かした安全で安心な自転車歩行者道のルート推進隊
- ・ 安全・安心の島づくり推進隊
- ・ まちづくり・地域づくり・人づくり事業

### (2) 評価（ビジョン委員アンケート結果）○

区分	全回答に占める割合	無回答を除いた割合
肯定的回答	23.5%	38.8%
中立的回答	28.8%	47.5%
否定的回答	8.3%	13.7%

#### 防災活動支援隊

クイズや体験コーナーを通じて、楽しく防災の知識や危機管理能力を身につける「ふれあい防災まちづくり」を開催。阪神・淡路大震災の教訓を忘れず、幅広い世代に防災への関心を高めてもらいたいと企画しました。



消火器体験



防災〇×クイズ

## 6 心あふれる交流の島

観光振興や都市農村交流に関する事業を実施した。成果については、肯定的な評価が否定的な評価をやや上回っています。

### (1) 取組（県民行動プログラム）

- ・ わかりやすく、美しい案内標識を目指す調査隊（再掲）
- ・ 既存道路を生かした安全で安心な自転車歩行者道のルート推進隊（再掲）
- ・ 癒やしの輪
- ・ 観光客おもてなしプラン
- ・ 都市住民との交流・田舎暮らし推進

### (2) 評価（地域ビジョン委員アンケート結果）△

区 分	全回答に占める割合	無回答を除いた割合
肯定的回答	17.4%	29.5%
中立的回答	29.5%	50.0%
否定的回答	12.1%	20.5%

#### 観光振興グループ

ボランティアガイドの育成・支援に取り組む、淡路島観光の充実を図っていきたく、「淡路島まるごとガイドツアー ボランティアガイド研修 in 須磨」などを開催しました。



須磨散策



NPO 法人の設立経緯等について説明を受ける

#### 花づくり・まちづくりグループ

台湾（台北）の花博と現地のオープンガーデン見学に行ってきました。



花博会場 Taiwan



活動センター前で



吉慶里の皆様と

台北、吉慶里にて、関西の花き取引で行き来があった老紳士の仲立ちによる交流があり、町長さんはじめ、地域の皆様に温かく迎えられ、町内のガーデンを案内していただきました。

## 7 課題

6つの実践目標のうち、「花いっぱい美しい島」については、「実現されてきている」又は「どちらかといえば実現されてきている」を合わせた肯定的回答が、「実現されていない」又は「どちらかといえば実現されていない」を合わせた否定的回答を大きく上回りました。この分野では、地域ビジョンの目標はよく達成されていると評価してもよいようです。

しかし、以下のような課題が残っています。

- ① 「魅力ある産業を興す島」については、否定的回答が、肯定的回答を大きく上回りました。この分野では、地域ビジョンの目標はあまり達成されていないと評価せざるを得ないようです。

緑花、美化運動といった住民が取り組みやすい分野と産業振興のように住民の取組だけでは成果を上げることが難しい分野との違いも大きいと思われます。

- ② 「文化が広がる島」と「安全で安心な島」については、肯定的意見が否定的意見を上回っているものの、「どちらともいえない」という中立的な意見が多くなりました。この分野は、どちらかというともよくなっていると評価してよいようですが、住民によっては日常の生活の中での関わりが薄く、成果が見えにくい分野なのかもしれません。

- ③ 「人をはぐくむ島」と「心あふれる交流の島」は、中立的意見が最も多く、肯定的意見と否定的意見も大きな差がなく、住民によって評価が分かれる結果となりました。この結果は、景観のように一目で分かるようなものと、教育や交流といった目に見えないものの差が出ているのではないかと思います。

- ④ 今回の地域ビジョンの見直しに当たっては、あまり達成されていないと評価された産業振興の分野をどのように進めていくかということと、教育、交流といった重要であるが見えにくい分野を、どのように見える形にしていくかということが必要と考えられます。

実践目標	評価
花いっぱい美しい島	◎
文化が広がる島	○
人をはぐくむ島	△
魅力ある産業を興す島	×
安全で安心な島	○
心あふれる交流の島	△



## 第3章 地域づくりの取組

従前ビジョンの策定からこれまでの10年間における地域づくりの主な取組は、次のとおりです。

### 1 地域づくり主体の再編

2001年（平成13年）に地域ビジョンが策定された後、市町合併の議論が進展しました。2005年（平成17年）1月に南あわじ市が、同年4月に淡路市がそれぞれ誕生し、2006年（平成18年）2月には洲本市と五色町の合併が実現したことで、島内は3市に統合されました。これに合わせて、農業協同組合、漁業協同組合、商工会その他団体の合併も進みました。

2009年（平成21年）4月には、淡路島の振興に取り組んできた財団法人淡路21世紀協会と淡路花博の理念継承を目的として活動してきた財団法人淡路花博記念事業協会とが合併し、淡路島の地域づくりの強力な推進組織となる財団法人淡路島くにうみ協会が設立されました。

2010年（平成22年）4月には、全島的な取組の必要性が高かった水道事業と観光事業の統合も実現し、淡路島の地域づくりの主体は大きく変化しています。

### 2 神戸淡路鳴門自動車道活用の取組

神戸淡路鳴門自動車道をいかに活用するかは、淡路島の大きな課題です。その課題解決のためには、利用しやすい料金設定が必要であるとして、全国の他の地域と連携した料金低減化の取組が進められました。

その結果、大幅な料金低減化が実現したものの、未だ暫定的な措置にとどまっており、その一部は終了してしまうなど、課題が完全に解決したとはいえない状況です。

また、航路の廃止に伴い、自転車、原動機付き自転車など一部の交通手段に不便が生じています。

### 3 環境にやさしい島づくり

島民主体による環境立島の実現に向け、あわじ菜の花エコプロジェクトやあわじ全島ゴミゼロ作戦、あわじエコライフスタイル運動など、「環境立島淡路」島民運動が推進されるとともに、温室効果ガス排出削減への取組や島民の景観に関する関心を高め、淡路島の美しい自然環境の保全と未来へ継承する美しい景観づくりの取組が推進されています。

また、オープンガーデンの開催やあわじ総合緑花プランの推進など、花とみどりあふれる美しい島づくりも推進されています。

### 4 多様な交流の島づくり

島内の観光協会等が統合して新たに設立された「淡路島観光協会」を核に、全島一体となって観光圏としての魅力を高める取組が進められるとともに、花みどりフェア

やうまいもんフェア、サイクリングアイランド淡路推進事業など観光交流事業が積極的に推進されています。

また、淡路人形浄瑠璃の県外公演をはじめとして、観光、文化、産業、生活など様々な分野における他府県との県際交流の推進や地域の魅力を活かした交流が進められています。

## 5 活力みなぎる島づくり

食のブランド「淡路島」推進戦略の展開や農商工連携による新製品開発支援、淡路いちじく生産力強化、淡路花き産地活性化など淡路島の基幹産業である農水産業のブランド化が推進されるとともに、ほ場整備、ため池・里海の保全対策、野生鳥獣被害防止対策など農水産業の基盤づくりが進められています。

また、若者の島内就職者を増加させることが喫緊の課題であることから、地域特性を活かした環境貢献型企業の誘致や地元企業への就職対策も推進されています。

## 6 安心して暮らせる島づくり

東南海地震等の被害を最小限に食い止めるには、地域住民の適切な行動が大切であることから、全島一斉総合防災訓練などによる防災意識の向上や自主的な取組が推進されるとともに、水害、土砂災害等から地域を守るために、ハード・ソフトによる総合的な対策が図られ、災害に強い基盤整備が推進されています。

また、高齢者が住み慣れた地域で安心して生活できることを目的とした「いきいき百歳体操」や「かみかみ百歳体操」のほか、多世代を対象とした「食育」推進活動や、「おいしい空気でおもてなし～淡路島禁煙ありがとうキャンペーン～」事業などが地域で展開されています。

## 7 総合的推進

自立・持続できる地域活性化モデルをめざす「あわじ環境未来島構想」の地域活性化総合特区採択に向け、地域の気運醸成や先導的施策が積極的に推進されようとしています。

また、地域の多様な県民ニーズや県政課題に的確に対応するとともに、地域住民の参画と協働による地域づくり活動を促進し、地域経営の効果的な推進を図りつつ、地域ビジョンの一層の推進が図られています。

## 第4章 数字で見る変化

### 1 経済に関する指標

神戸淡路鳴門自動車道の料金低減化等によって主要観光地利用者数は増加しているものの、総生産額は大きく減少し、1人当たりの市町民所得も減少している。

#### (1) 総生産額（名目）

2008年度（平成20年度）の総生産額は、2001年度（平成13年度）と比べて1割以上減少している。特に第2次産業の落ち込みが激しい。

区分	H13	H20	増減	就業者1人当たり（千円）		
	（百万円）	（百万円）	（百万円）	H13	H20	増減
淡路地域	492,747	417,515	△75,232	5,807	5,135	△672
第1次産業	34,633(6.7%)	24,116(5.6%)	△10,517	—	—	—
第2次産業	173,741(33.8%)	94,230(21.8%)	△79,511			
第3次産業	305,858(59.5%)	313,387(72.6%)	7,529			
全県	18,528,668	19,096,572	567,904	8,070	8,044	△26
対全県比	2.66%	2.19%	—	72.0%	63.8%	—

\* 県統計課

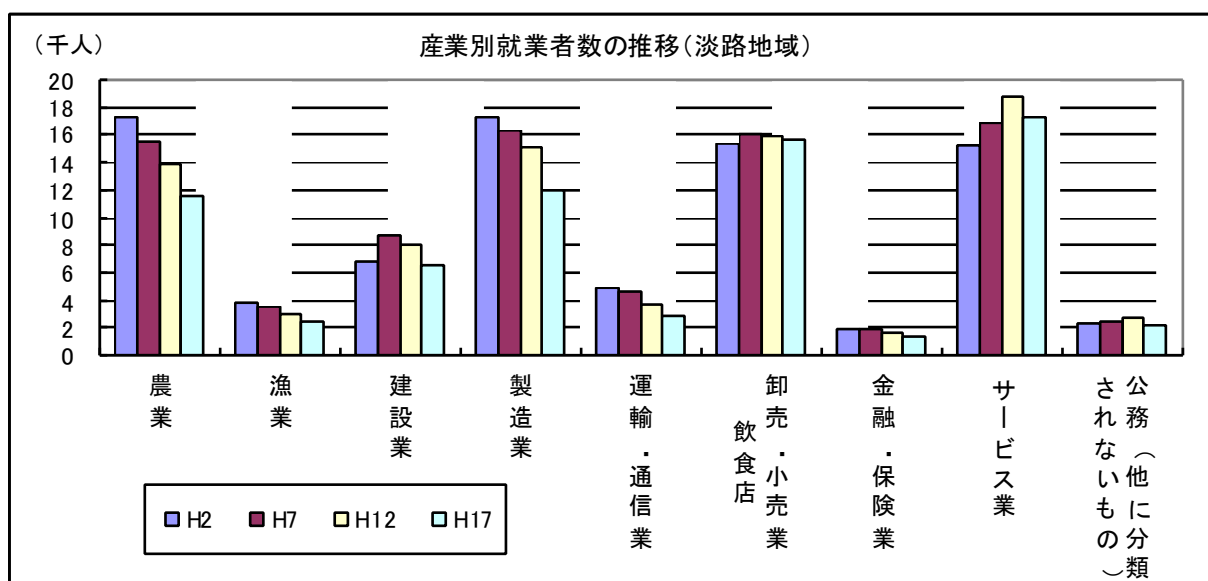
#### (2) 産業別就業者構成比

第1次産業及び第2次産業から第3次産業へ労働者がシフトしている。

(%)

区分	淡路地域			全県		
	H12	H17	増減	H12	H17	増減
第1次産業	20.2	19.5	△0.7	2.5	2.5	0.0
第2次産業	27.8	25.5	△2.3	30.9	27.7	△3.2
第3次産業	52.0	55.0	3.0	66.6	69.8	3.2
計	100	100	—	100	100	—

\* 総務省統計局「国勢調査報告」から作成



(産業別就業者数の推移)

(人)

	農業			漁業			建設業			製造業		
	H2	H17	H2比	H2	H17	H2比	H2	H17	H2比	H2	H17	H2比
洲本市	3,731	1,548	41.5%	796	497	62.4%	2,292	1,781	77.7%	5,449	3,048	55.4%
南あわじ市	8,806	6,874	78.1%	989	628	63.5%	2,075	2,446	117.9%	6,740	5,329	79.1%
淡路市	4,718	3,192	67.7%	2,009	1,295	64.5%	2,438	2,327	95.4%	4,998	3,580	71.6%
淡路地域	17,255	11,614	67.3%	3,794	2,420	63.8%	6,805	6,554	96.3%	17,237	11,957	69.4%

(3) 農業産出額

2007年度(平成19年度)の農業産出額は、2001年度(平成13年度)と比べて約7%減少している。

(千万円)

区分	H13	H19	増減
淡路地域	3,756	3,497	△259(6.9%)
全県	16,355	14,622	△1,713(10.6%)
対全県比	23.0%	23.9%	—

\* 県統計課

(4) 漁業生産額

2008年度(平成20年度)の漁業生産額は、2001年度(平成13年度)と比べて3割以上減少している。

(百万円)

区分	H13	H20	増減
瀬戸内海区	45,950	31,662	△14,288(31.1%)
全県	55,816	41,355	△14,461(25.9%)
対全県比	82.3%	76.6%	—

\* 近畿農政局兵庫農政事務所「漁業生産額」

(5) 製造品出荷額等

2009年度(平成21年度)の製造品出荷額等は、2001年度(平成13年度)と比べて半分近くにまで落ち込んでいる。

(万円)

区分	H13	H21	増減	1事業所当たり
淡路地域	43,708,766	22,526,758	△21,182,008(48.5%)	43,404
全県	1,312,128,846	1,338,398,772	26,269,926(2.0%)	132,188
対全県比	3.3%	1.7%	—	—

\* 県統計課

(6) 地場産業の生産額

線香を除き、生産額は大きく減少している。特に粘土瓦の落ち込みが激しい。

(百万円)

区分	H13	H20	増減
粘土瓦	13,478	4,413	△9,065(67.3%)
線香	11,089	12,000	911(0.7%)
手延べ素麺	159	109	△50(31.4%)
真珠核	470	300	△170(36.2%)

\* 淡路県民局

(7) 商品販売額

2007年度(平成19年度)の商品販売額は、2002年度(平成14年度)と比べて1割以上減少した。

(万円)

区分	H14	H19	増減	1店舗当たり
淡路地域	30,891,005	27,274,521	△3,616,484(△11.7%)	9,811
全県	1,317,756,522	1,326,926,426	9,169,904(0.7%)	21,542
対全県比	2.3%	2.1%	—	45.5%

\* 県統計課

(8) 主要観光地利用者数

2009年度（平成21年度）の主要観光地利用者数は、2001年度（平成13年度）と比べて約17%増加したが、宿泊客はそれほど増加していない。

（千人）

区分	H13	H21	増減
淡路地域	10,347	12,128	1,781(17.2%)
全県	119,178	136,087	16,909(14.2%)
対全県比	8.7%	8.9%	—

\* 兵庫県観光客動態調査

(9) 1人当たり市町民所得

2008年度（平成20年度）の1人当たり市町民所得は、2001年度（平成13年度）と比べて約7%減少した。

（千円）

区分	H13	H20	増減
淡路地域	2,377	2,210	△167(△7.0%)
全県	2,657	2,740	83(3.1%)
対全県比	89.5%	80.7%	—

\* 県統計課

## 2 社会に関する指標

大学進学率、NPO 法人数等は着実に上昇しているものの、人口減少、高齢化は急速に進んでおり、高齢単身世帯も増加している。自殺率は県下で最も高い水準にある。

### (1) 総人口

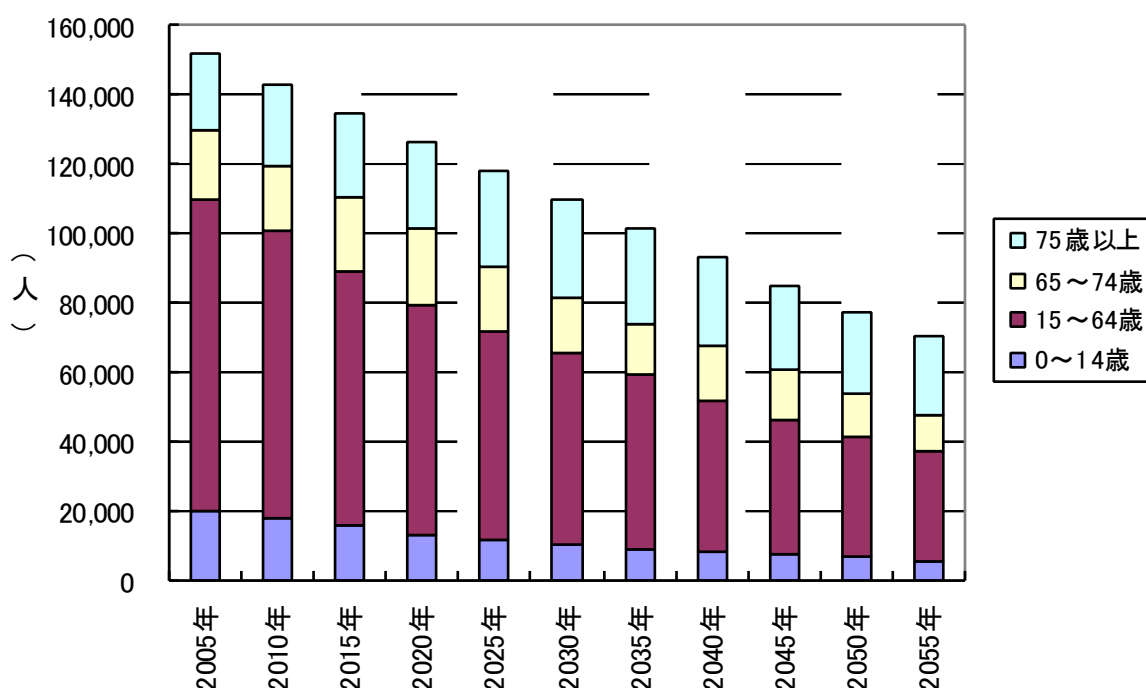
人口は、2000年（平成12年）から2010年（平成22年）までの10年間で約1割減少した。このまま人口減少が続くと、2055年には現在の約半分の7万人になると推計されている。

(人)

区分	H12	H17	H22	増減(H22対H12)
洲本市	52,248	50,030	47,254	△4,994(△9.6%)
南あわじ市	54,979	52,283	49,834	△5,145(△9.4%)
淡路市	51,884	49,078	46,459	△5,425(△10.5%)
淡路地域	159,111	151,391	143,547	△15,564(△9.8%)
全県	5,550,574	5,590,601	5,588,133	37,559(0.7%)

\* 総務省統計局「国勢調査報告」から作成

総人口及び年齢4区分別人口の推移



\* 兵庫の将来像検討会

(2) 年齢別人口構成比

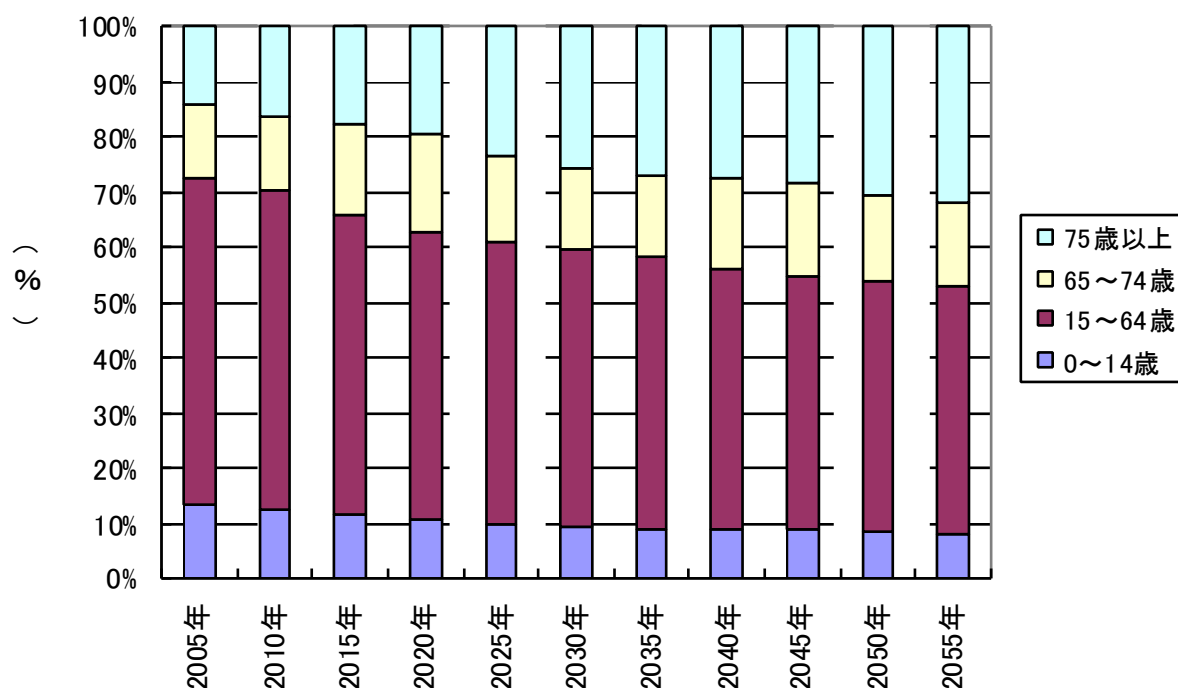
2000年（平成12年）から2010年（平成22年）までの10年間で老年人口の比率は、5.2%増加した。2035年には、生産年齢人口が総人口の半分を下回り、2055年には、高齢人口が47%、生産年齢人口は44.8%になると推計されている。

(%)

区分	淡路地域				全県			
	H12	H17	H22	増減 (H22対H12)	H12	H17	H22	増減 (H22対H12)
年少人口	14.6	13.3	12.5	△2.1	15.0	14.3	13.6	△1.4
生産年齢人口	60.5	59.3	57.4	△3.1	68.1	65.8	62.9	△5.2
老年人口	24.9	27.4	30.1	5.2	16.9	19.9	22.9	6.0

\* 総務省統計局「国勢調査報告」から作成

年齢4区分別人口構成の推移



\* 兵庫の将来像検討会



### (3) 合計特殊出生率

全県と比べると高い水準にあるが、低下傾向にある。全国、全県の最新の調査では上昇に転じているが、出生率の低下に歯止めがかかったとまで判断することはできない。

区分	H12	H17	H22	増減(H22対H12)
洲本市	1.59	1.52	1.67	0.08
南あわじ市	1.51	1.51	1.71	0.20
淡路市	1.47	1.29	1.37	△0.10
淡路地域	1.52	1.44	1.58	0.06
全県	1.38	1.25	1.41	0.03
全国	1.36	1.26	1.39	0.03

\* 県情報事務センター、県統計課

### (4) 小規模集落の数

小規模集落は、急速に増加している。

区分	H19	H22	増減
淡路地域	44	56	12
全県	221	270	49

\* 兵庫県

### (5) 単独世帯割合（うち高齢者世帯）

単独世帯は増加しており、そのほとんどは高齢者世帯である。全県と比較すると高い水準ではないが、農村部の中では最も高い。

(%)

区分	H12	H17	増減
神戸地域	31.2(9.0)	33.2(11.0)	2.0(2.0)
但馬地域	18.1(7.5)	19.7(8.7)	1.6(1.2)
丹波地域	17.1(7.6)	18.8(8.8)	1.7(1.2)
淡路地域	21.5(9.5)	22.2(10.8)	0.7(1.3)
全県	24.9(7.4)	26.7(9.1)	1.8(1.7)
全県との差	△3.4(2.1)	△4.5(1.7)	—

\* 総務省統計局「国勢調査報告」から作成

(6) 学校数、児童・生徒数等の推移

(小学校)

区分	H13	H22	増減	増減率
学校数	60	49	△11	△18.3%
学級数	467	425	△42	△9.0%
児童数(人)	9,232	7,696	△1,536	△16.6%

\* 学校基本調査

(中学校)

区分	H13	H22	増減	増減率
学校数	20	19	△1	△5%
学級数	182	154	△28	△15.4%
生徒数(人)	5,261	4,127	△1,134	△21.6%

\* 学校基本調査

(高等学校)

区分	H13	H22	増減	増減率
学校数	9	8	△1	△11.1%
生徒数(人)	5,202	3,762	△1,440	△27.7%

\* 学校基本調査

(児童・生徒数の将来予測) ※公立学校のみ

(人)

区分	ピーク時 児童生徒数(A)	平成28年 児童生徒数(B)	増減	比率 (B)/(A)×100
小学校	(S55)15,133	6,701	△8,432	44.3%
中学校	(S61)7,634	3,555	△4,079	46.6%

\* 兵庫県

(7) 進学率(大学等進学率)

大学等への進学率は、増加しているが、全県と比べると低い水準にある。

(%)

区分	H13	H17	増減
淡路地域	45.7	49.4	3.7
全県	54.6	60.7	6.1
全県との差	△8.9	△11.3	—

\* 学校基本調査

(8) NPO 法人の数

NPO 法人の数は着実に増加している。

1 法人 (H13.3) →51 法人 (H23.3)

\* 県地域協働課 (平成 10 年 NPO 法施行)

(9) 自殺者数

県全体と比べ、自殺率は高い。

(人)

区分	淡路地域		全県
	自殺者数	自殺率	自殺率
H15	32	20.6	22.9
H16	52	33.1	23.3
H17	44	29.1	23.4
H18	42	28.1	24.1
H19	58	38.9	25.4
H20	36	24.5	21.9
H21	50	34.5	22.1

\* 自殺者数は、人口動態調査による。自殺率は、人口 10 万人対。

### 3 環境に関する指標

下水道普及率などの環境関連施設の整備は、低い水準ではあるが着実に進んでおり、環境意識も高まりつつある。

#### (1) 温室効果ガス排出量

2009年度（平成21年度）の温室効果ガスの排出量は、1990年度（平成2年度）と比べて約6割減少したが、製造業の不振が主な原因である。

(t)

区分	H2	H21	増減
洲本市	518,006	425,568	△92,438
南あわじ市	2,961,504	632,114	△2,329,390
淡路市	726,599	307,581	△419,018
淡路地域	4,206,109	1,365,263	△2,840,846

\* 環境自治体白書 2010年版

#### (2) 再生可能エネルギー自給率

低炭素社会、原子力不安、地域経済活性化などの観点から注目されている地産型の再生可能エネルギーの自給率は、県下で最も高いレベルにある。

(%)

区分	H19	H20
洲本市	1.82	1.93
南あわじ市	16.92	20.60
淡路市	2.71	2.86
全県	1.23	1.27

\* 永続地帯 2008年度版報告書・永続地帯 2010年版報告書

#### (3) 下水道普及率

2009年度（平成21年度）の下水道普及率は、2002年度（平成14年度）と比べて28ポイント上昇したが、依然県下では低いままである。

(%)

区分	H14	H21	増減
淡路地域	19.0	44.5	25.5
全県	84.9	91.1	6.2
全県との差	△65.9	△46.6	—

\* 兵庫県

#### (4) あわじ菜の花エコプロジェクトの進捗

環境のシンボリックなプロジェクトである「あわじ菜の花エコプロジェクト」は、順調に取組が広がっている。

区分	H18	H22	増減
菜の花栽培面積 (ha)	10	45	35
廃食用油回収量 (L)	13,292	33,256	19,964
BDF 精製量 (L)	9,229	21,623	12,394

\* 淡路県民局

#### (5) 環境意識

環境保全意識は、全般的に高まっている。

(%)

質問項目	H14	H22	増減
ごみの分別やリサイクルに協力している人の割合	88.4	92.7	4.3
自然を守るためなら生活が不便でもよいと思う人の割合	61.1	57.4	3.7
身近な環境のことを知る仕組みが整っていると思う人の割合	12.3	22.5	10.2
水を大切に使っている人の割合	78.4	79.8	1.4
電気のムダ使いに気をかけるなど、環境に配慮している人の割合	80.6	84.9	4.3

\* 県民意識調査



## 第Ⅱ部 新たな“国生み”をめざして（改訂ビジョン）

第1章 淡路島を取り巻く環境の変化

第2章 淡路島の直面する課題

第3章 淡路島が持つ可能性

第4章 淡路地域ビジョンの理念

第5章 淡路地域ビジョンの目標

第6章 ビジョン実現のためのポイント

第7章 目標の指標化による検証

淡路地域ビジョン改訂版

## 第Ⅱ部 新たな“国生み”をめざして(改訂ビジョン)

### 第1章 淡路島を取り巻く環境の変化

#### 1 世界の現状と課題

##### —危機に直面する人類—

##### (1) 様々な危機的状況

ビジョンが作られてからの10年間で、世界も日本も、その社会・経済状況は大きく変化しました。

その中で注目すべきは、世界の人々が「人類の持続可能性」を最も重要な価値観として共有するようになったことでしょう。

既に人間の活動は「地球資源と環境容量」の限界を超えていて、このままの状況が続けば、そう遠くない将来に人類の生存自体が危ぶまれています。

では、その危うさとは具体的にはどのようなものでしょうか。これを大きくまとめると、次の4つに整理されるでしょう。

- 1 地球環境の危機  
気候変動問題や地球生態系の破壊など
- 2 資源枯渇の可能性  
石油生産量の減少（ピークオイル）、希少金属の高騰など
- 3 経済破綻の可能性  
リーマンショックに見られるような世界同時不況や財政危機など
- 4 社会崩壊の可能性  
地域コミュニティの役割や機能の崩壊、経済格差の拡大など

##### (2) 危機をもたらしたもの —その1 大量の化石燃料消費—

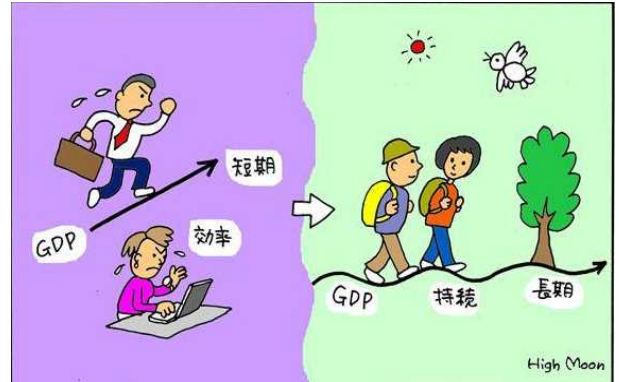
そのような危機的な状況が生じた原因を辿ると、最大のものは安価な石油の使用ということになります。膨大な化石燃料消費が可能となった20世紀を「石油文明」の時代と呼ぶなら、この文明は豊かさと同時に、その副作用として上に挙げたような様々な危機的状態をもたらしました。

周知のとおり、石油文明は近代科学・技術の力を得て大量生産の産業システムを作り上げ、世界規模の自由市場の仕組みと相まって、大量生産や大量消費を可能にしました。これが、人類の歴史上で初めての豊かさを私たちにもたらしましたが、その副作用というべき様々な形と量の廃棄物が、地球の大地や海や大気にまで広がり、資源の浪費が拡大し、温室効果ガスの排出も急増しました。

### (3) 危機をもたらしたもの —その2 経済的利益偏重の市場原理主義—

危機的な状況がここまで進んだのには、ヨーロッパやアメリカから広がった市場原理主義も大きく影響しているでしょう。市場経済システムは、需給調整に優れた経済システムであり、経済の豊かさをもたらしました。しかし、市場機能を極端に重視し、政府の介入を極力排除しようとするいわゆる市場原理主義は、経済の不安定化、所得格差の拡大、さらに地球環境の破壊、エネルギー・食糧危機をもたらしたといわれています。

経済的利益の大きさだけを尺度にした経済システムを乗り越えて、環境や社会（人間の幸せ）の価値とも調和するような新しい経済システムが今、求められています。



## 2 日本の現状と課題

### —深刻化する日本社会—

#### (1) 経済の現状と課題

##### ア 停滞する経済

1990年代初頭のバブル崩壊から約20年間にわたって日本経済は低迷を続けています。特に、2008年（平成20年）の世界金融危機（リーマンショック）により深刻なダメージを受け、国民の間には閉塞感が漂っています。2010年（平成22年）頃ようやく立ち直りの兆しを見せましたが、2011年（平成23年）3月に東日本を襲った大震災と大津波は、今後の我が国の経済に深い影を落としています。

中長期的に見ても、新興国の台頭、石油や資源の価格高騰、地球環境や資源の制約などを考慮すると、今後無限に続く成長を期待するのは難しいことがようやく実感として認識されてきました。

したがって、これまでの「量的拡大」から「質的向上」に向けた転換が必要になるでしょう。

##### イ 地方経済の衰退

地方経済は衰退し、地域間の経済格差は拡大しつつあります。

高度成長期に工業重視の経済成長が最優先課題とされた結果、農村部から都市部への人口流入が増大し、地域間の所得格差は拡大を続けました。

その後も、ヒトだけでなく、モノ（資源・エネルギー）、カネ、情報が大都市に集中する中央集権構造が続いています。

他方、地方の主力産業である第1次産業は競争力を失い、農村社会は一層衰退しました。その結果、食料自給率の低下や、食の安全・安心の問題が大きな課題



となっています。

これからは、「都市部中心」から「地方の自立性」を重視した経済構造に転換していく必要があります。

## (2) 社会の現状と課題

### ア 地域社会の衰退

我が国の人口は、出生率が低下を続けた結果、2004年（平成16年）の約1億2,779万人をピークに人口は減少し始め、人口減少社会に突入しました。

また、65歳以上の高齢者の割合（高齢化率）は、2009年（平成21年）時点で22.7%であり、2050年（平成62年）には約40%に達すると見込まれています。

若年人口の流出が続く地方では、人口減少・少子高齢化が著しく、農林水産業などの第1次産業の担い手不足の問題や、地域社会の歴史や文化、伝統の喪失など、日本社会の基盤をも危うくする問題を抱えています。

このため、魅力ある農林水産業の振興や地方における雇用の場の確保に加え、高齢者も健康で、安心して充実した生活を送ることができる地域づくりが求められています。

### イ 社会問題の広がり

地域経済の不振、住宅や都市構造の変化、人々の意識や価値観の変化等により、地域コミュニティが崩壊しつつあります。

こうしたコミュニティの崩壊は、不安定な雇用形態や低賃金による将来不安などと相まって、人々の心の荒廃にもつながり、様々な社会問題の広がりとなって現れています。

家庭内暴力や児童虐待、親族殺人、子どもたちの中でのいじめの問題、高齢者の社会的孤立や自殺の頻発など、痛ましい事件が後を絶ちません。

地域社会が本来有するコミュニティ機能を維持・強化し、社会的連帯感の回復を図っていくことが必要です。

## (3) 環境の現状と課題

### ア 求められる低炭素化

近年、地球温暖化や資源制約といった、環境・エネルギー問題への関心が高まっています。

地球温暖化については、京都議定書の6%削減の確実な達成や、2020年までに1990年比で25%削減するという中期目標、2050年までに80%削減するという長期目標の達成に向けて、様々な取組が行われています。

また、資源制約については、アジア諸国の急激な経済成長に伴うレアメタルや化石燃料の需給の逼迫が、資源の乏しい我が国に深刻な影響を及ぼすおそれがあり、国内で資源を循環させる仕組みづくりが必要ですが、化石燃料に基づくエネルギーは使えば使うほどなくなり、循環させることができません。

これらの環境・エネルギー問題を解決するためには、国はもちろん、それぞれの地域において、低炭素化など環境負荷の低減に資する独自の取組の下に地域づくりを進めることが必要です。

なお、東日本大震災による原子力発電所の事故は、原子力発電を含む我が国のエネルギー政策や、私たちの生活や生産活動のあり方そのものにも大きな影響を与えるものと考えられます。

## イ 森林・海の生態系や生物多様性の危機

私たちの足元の環境＝自然生態系の豊かさと健全さのもとで、私たちの命は支えられ、連綿と続く命の連続性が約束されます。今日話題になることの多い「生物多様性」は、〈生態系の多様性〉と〈種の多様性〉と〈遺伝子の多様性〉からなると言われます。私たち淡路島に住む者も、地球や淡路島の生態系や生物多様性の一員であり、いわばそれらによって生かされている存在なのです。

いま、この生物多様性が失われようとしています。特に 20 世紀に入ってからの人間の活動や環境問題によって、多様性消失のスピードは加速しています。

生物多様性の危機は、私たち人類（ヒト）という種の絶滅にもつながっていきかねない状況にあります。なぜなら私たちは、生きるのに必要な多くの恵みを生態系から受けており、その生態系の複雑にして絶妙なバランスは生物多様性によって維持されているからです。

私たちは、いま一度「自然の恵み」に感謝し、生物多様性を保全する意義を確認する必要があります。

## ウ 自然災害への備え

2011 年（平成 23 年）3 月 11 日に発生した東日本大震災により、1995 年（平成 7 年）の阪神・淡路大震災の教訓を踏まえて取り組んできた自然災害への備えについて再考する必要が生じました。

一つは、想定を超える自然の猛威への対応を根本から考え直すこと、もう一つは、多くの技術とインフラに支えられた今の社会がいかに脆弱かを再認識することです。

私たちは、「自然への畏れ」を深く自覚し、真に安全な地域づくりについて、謙虚に考えなければなりません。

## 第2章 淡路島の直面する課題

### 1 経済の現状と課題

#### (1) 地域経済の縮小

第1次産業は、生産額、就業人口ともに減少していますが、これは淡路だけでなく、全国的に同じ傾向です。第2次産業についても、堅調な線香産業を除き、瓦などの地場産業は、生産額、就業人口ともに大きく減少しています。第3次産業は、全体では生産額が増えているものの、商品販売額は減少しています。

また、1人当たりの市町民所得は県下で最も低く、さらに減少傾向が続いています。

既存産業にとって、大都市圏に近い立地でありながらそれを生かしていない要因の一つが、高額な高速道路料金です。水の値段が高いことと合わせて新たな企業の立地が十分に進まない理由の一つでもあります。

企業は、より高度な知識、技術を持つ人材を求めるようになっていますが、淡路地域では、こうした人材を十分に集められないことも企業立地が進まない一因となっています。

さらに、商品販売額の低下については、人口減少、高齢化等による購買力そのものの低下、神戸淡路鳴門自動車道の開通によるストロー効果等が原因と考えられます。

#### (2) 若者の流出

淡路島の若者の多くは、高校卒業後、進学や就職のため淡路島を離れますが、淡路島に戻ってきて就職する者が著しく減少しており、進学率の上昇に合わせて若者の流出が加速しています。

就労場所の絶対量の不足、専門知識が生かせる職業の不足、娯楽の不足などが原因と考えられます。

また、高校卒業後、多くの若者が島外で一人暮らしをすることになるため、消費者被害防止の観点から、学齢期からの消費者教育も課題になります。

#### (3) 地域産業の課題

##### ア 地場産業

線香産業は、海外への事業展開や体験メニューなど新たな分野の開拓が比較的順調に進み、堅調に推移しています。一方、淡路瓦の生産は、建築様式の変化等により大きく落ち込んでいますが、線香産業と同じく海外への事業展開が期待されています。

##### イ 農業

生産力の強化や省力化の取組を進めるとともに、ブランド力の強化や販路開拓を積極的に進める必要があります。

従事者の高齢化が進んでおり、後継者不足も深刻になっています。

## ウ 漁業

漁獲物の減少や小型化など資源の減少が懸念されており、資源培養型漁業を一層進める必要があります。農業と同様、従事者の高齢化が進み、後継者不足が深刻化しています。

## エ 観光

観光入込客数が増加しているにもかかわらず、宿泊客が伸びないことが課題となっています。国内の旅行市場が縮小していく中で、新たな観光メニューの開発やインバウンド対策を進めていくことが課題です。

\* インバウンド：海外から日本に来る観光客

## オ 健康福祉・環境産業

少子高齢化や世帯人数の縮小、生活様式の多様化などにより、健康福祉関連サービスに対するニーズが拡大していますが、地域密着型の健康福祉サービスをコミュニティビジネスとして実施していくことが必要です。

雇用のミスマッチ等により、健康・福祉産業への就労が進まない状況があり、職業訓練など就業への支援方策の拡大を図る必要があります。

また、放置竹林、鳥獣害等の問題に対して、地域適正技術を導入するなどして、環境の創造に寄与する新産業を興していくことも必要です。

## 2 社会の現状と課題

### (1) 都市機能の低下

人口減少や住宅・小売店の郊外への立地等によって、中心市街地の空洞化が進み、都市機能が分散化しつつあります。都市機能の分散化は、自家用車での移動を助長し、そうした手段を持たない住民の生活を不便なものにしています。

### (2) 空間管理の荒廃

人口減少によって、社会の担い手・支え手が減少し、空地・空家の増加、耕作放棄地の拡大、里地・里山の荒廃、森林等の防災機能の低下など空間管理が荒廃しつつあります。

### (3) コミュニティの維持困難

人口減少と高齢化によって、様々な地域活動の担い手が不足し、コミュニティの能力が低下しつつあります。特に小規模な離村では、集落自体の存続が危ぶまれるようになってきています。

### (4) 学校の小規模化

少子化の進行により、児童・生徒が減少し、学校の小規模化が進んでいます。小規模な学校では、児童・生徒に目が届きやすく、きめ細かな指導ができる一方、様々

な児童・生徒との出会いや切磋琢磨する機会、クラブ活動の選択肢が減少する等の問題も生じてきています。

## **(5) 少子高齢化に起因する問題**

### **ア 少子化問題**

淡路地域においては、死亡数が出生数を上回り、人口の自然減少が続いており、合計特殊出生率は人口を維持するのに必要な 2.08 を大きく下回っています。これは、未婚化晩婚化の傾向が顕著になってきていることが大きな原因です。

### **イ 高齢者の問題**

淡路地域の人口が減少していく一方で、高齢者数は年々増加しており、高齢化率は今後さらに高くなっていきます。また、これに伴って一人暮らし高齢者も増加していることから、高齢者が住み慣れた地域で、健康で安心して生活できる基盤づくりが課題です。

### **ウ 子育て世代の問題**

世帯の小規模化が進み、コミュニティが希薄化する中では、子育てに関する負担が母親一人に集中することになっています。地域全体で子育てを支援する仕組みを作っていくことが課題となっています。

子育てと両立できるような地域に密着した仕事を掘り起こしたり、ワークライフバランスの見直しによる就労環境の改善を図ったり、貨幣経済以外の経済分野の充実を図ったりすることで、子育てを行う者の生活の安定を図ることも課題です。

### **エ 労働者不足と所得の減少**

少子高齢化によって生産年齢人口が減少し、従属人口が増加していくと、労働力不足と国民一人当たりの所得の減少が問題となってきます。

労働者不足と所得の減少は経済的な問題ですが、今後は人口問題から生じる部分が大きくなると考えられます。出生率の向上などの人口増加対策やワークライフバランスの見直しによる労働力の確保といった社会的な対応が課題になってきています。

### **オ 伝統芸能等の後継者不足**

少子化の進行に伴い、郷土芸能等の後継者不足も深刻化しています。淡路人形浄瑠璃のように、プロ集団を頂点に、子どもから大人まで多くの後継者があり、その活動を支援する仕組みまであるものもありますが、多くの伝統芸能の担い手は高齢化の一途をたどっています。伝統芸能を継承する意欲ある者を養成するためには、新たな視点でその魅力を磨くことも重要になっています。

## (6) 交通基盤の問題

### ア 橋の料金の問題

淡路島の可能性を広げていく上で、高速道路料金を低減化し、交流を拡大することは、大きな課題です。

しかし、明石海峡大橋の開通によって、ストロー効果や、海上交通・島内公共交通の衰退が生じたとの指摘もあり、地域の主体性を喪失しないようしっかりとたまちづくりの構想を持ちながら、料金低減化の取組を進めていくことが必要です。

### イ 島内路線バスの縮小

島内路線バスの縮小に伴い、交通弱者（高齢者・学生等）の移動困難などの問題が生じています。

また、公共交通の縮小は自動車交通の増加につながり、道路の渋滞やCO<sub>2</sub>の排出量が増加し、環境への影響も懸念されます。

従来 of 公共交通に代わって、コミュニティバスが運行されている地域もありますが、経営的には厳しい状況です。

### ウ 海上交通の縮小

海上交通の縮小に伴い、港の衰退、陸上交通遮断の場合の代替ルート of 減少等の問題が生じています。また、原動機付き自転車、自転車、車いすなどによる交通が制限を受けることとなりました。

また、港湾施設などが遊休化しつつあるので、産業港や観光港としての活用などを検討する必要があります。

## 3 環境の現状と課題

### (1) 地球温暖化

「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の第4次評価報告書」（2007年（平成19年））によると、気候システムの温暖化には疑う余地がなく、その原因は人為起源の温室効果ガスの増加による可能性が非常に高いとされ、異常気象の頻発や生態系への影響、農業や漁業への影響、熱帯性の病原菌の北上による健康への影響（感染症）など、私たちの生活に様々な悪影響が生じる可能性が指摘されています。

### (2) 生態系の危機

生態系の危機は、竹林の増加などの植生の変化による森林の防災機能の低下、ナルトサワギク、ブラックバスなどの外来種の増加、野生動物の異常な増加による獣害の発生、漁獲量の減少など目に見える問題となっています。さらに問題が深刻化すれば、食糧や水の供給、気候の制御、栄養の循環、光合成による酸素の供給、精神的・文化的利益などの生態系サービスに支障をきたすおそれもあります。

### (3) 資源の枯渇

資源の枯渇の問題は、現在でも石油価格の高騰などの形で、経済活動や家庭生活に直接影響を与えています。新興国の経済成長に伴い、様々な資源への需要が急増すると予想される中、資源の枯渇の問題は、加速度的に深刻さを増すものと考えられています。

### (4) 淡路らしい景観の喪失

緑花運動や環境美化運動などの長年の住民活動により、淡路島のアメニティは着実に向上しました。一方で、人口減少・高齢化による地域活力の低下や明石海峡大橋の開通に伴う開発によって、空家や耕作放棄地の増加、街並みの変化など、淡路らしい景観の喪失が指摘されるようになってきています。

### (5) 自然災害への備え

阪神・淡路大震災や2004年(平成16年)の台風23号を契機として、ハード・ソフト両面の防災対策が進められてきました。2011年(平成23年)3月に発生した東日本大震災によって、防災計画の見直しをはじめ、近隣同士の助け合いをさらに深める(共助)とともに、住民自ら日頃の備えを十分に行う(自助)ことが重要になっています。

近い将来発生すると予想される東海、東南海、南海地震を想定して、十分な備えを行っていく必要があります。



### 第3章 淡路島が持つ可能性

#### — 稽古照今 — (古を稽えて、今を照らす)

##### 1 淡路島が担うべき役割

ここ10年間の急激な時代の変化の中で、これからの淡路島が目指すべき将来像を考えるにあたって、まずは、この島の原点に立ち返り、今一度この島の持つ「可能性」を探ってみることにしました。

では、この島の原点とは何でしょうか？ それは、「国のはじまりは淡路島」というこの島の古き歴史に遡ります。

今、混沌とした時代の中で、世界中の人々が不安を抱えて生きています。こうした事態を迎えるであろうことは、既に多くの人々が懸念してきたことです。ただ、「空白の時代」と呼ばれたこの約20年の間に何も対策を行ってこなかったわけではなく、様々な施策を考え実行してきました。ところが、継ぎ接ぎの対策を実施するだけではどうすることもできないところまで来てしまったのです。この混沌とした時代の中で未来を切り拓くことは、決して容易ではありません。だからこそ、今一度私たち日本人の原点に立ち返って、国の基本的な方向をも見直す必要があると思います。

マイケル・サンデル氏の講義“正義とは何か、私たちの行動を決める規準は何か、社会の方向を指示する規範は何か”の答えはこうでした。「一義的な正解はない。ただし、二つの拠り所がある。その一つは、『人類が共通して、これこそが正義だと考える価値（自由、平等、生命の尊重など）』であり、二つ目は、『地域の慣習、伝統、文化で培われてきた地域独自の物語』である。そして、この二つの間を行き来しながら、自分達の時代と場所に最も合った答えを導き出すことである。」と…。

つまり、“地域の物語”こそが、そこに住む人々の行動の規範を与える大事な一つの根拠であるということです。

また、古事記の序文の中に、「稽古照今」という言葉があります。それは、いつの時代にあっても古き時代を顧みて、現代の足りないところを補い学ぶことです。だから今こそ、地域の歴史を振り返ってみる必要性を感じるのです。

昔から、「孫子の代まで」と言いますが、これからのビジョンは、100年先を見通すくらいの計画でなければなりません。淡路島は「国のはじまり」という他の地域には決して見いだせない歴史を持っています。ここからこの国のすべてがはじまりました。

つまり、この国の原点は、実はこの淡路島なのです。これからの未来を示すヒントは、きっとこの島の歴史と文化の中にあると言えるのではないのでしょうか。

##### — 神話から学ぶこと —

人と生き物の間に隔たりがなく  
過去と未来が同じ価値を持ち

古いものや弱いものを大切にする

誰かと競うよりも協調し

争いよりも平和を大切にする



## 2 淡路島の歴史から見えてくる未来

淡路島は、瀬戸内海の東端にあり、畿内への海からの入り口に位置するところから、古来文化、軍事、交通などにおいて重要な役割をはたし、独自の歴史をたどってきました。実際に、古代日本の地図を広げてみると、淡路島の位置がちょうど国の中央にあることが一目瞭然です。

淡路島は、とても小さい島です。しかも島の65%が山で、平地は3分の1ほどです。しかし古代から、政治の中心が江戸に移るまで、淡路島はその存在が国中から注目される島でした。

2010年（平成22年）、関西広域連合ができ、関西の力を結集しようとする動きが高まっています。そんな中、この度の東日本大震災では、「関西の元気」が求められています。こうした経験の中から、東京中心の時代から、関西圏にも国を背負う責任が分担されてくるような動きがあります。そうすると、また、淡路島がその位置から何か大きな役割を求められるようになる可能性もあるのではないのでしょうか。

### （1）淡路の海上交通と道路

淡路島では、東北から九州方面の影響を受けた縄文時代の土器が出土しています。淡路島の周囲の海は非常に穏やかで、海上交通を基盤とした遠距離交流の中継拠点であったと考えられています。弥生文化は、北九州からいち早く淡路島に入って水稻耕作や青銅器文化を伝えました。

こうした海上交通が発達した理由として、日本書紀にその活躍ぶりが記されている淡路島沿岸に住む海人<sup>あま</sup>たちの存在があります。このすぐれた航海術を持つ海人たちは、海部<sup>あまべ</sup>に編入されて、朝廷に仕えました。

また陸路については、都から紀伊・淡路・四国へと連なる南海道がありました。

このように淡路島は、古代日本の交通の要所であり、都が江戸に移るまで、いつの時代も時の権力者が淡路島を重視していました。

#### （淡路島を関西の交通の要に）

この歴史を見たときに、今は淡路島と他地域を結ぶ交通路が、明石海峡大橋と大鳴門橋という二つの橋だけになってしまったことで、他地域との交流を見る際の視野がどうしても阪神間と四国が中心になってしまっているように思います。ところが、淡路島から周囲の海を見渡せば、単に瀬戸内海と淡路島の関係だけでなく、古代から、播磨・讃岐・和泉・摂津・阿波への海を共有しながら生活してきたという生活空間の広がり気付かされます。それは、古代からの航路を見直してみるとよく分かります。

また、この国はもともと地形が複雑なので陸上交通網を作ることが困難です。一方で瀬戸内海は、穏やかな内海で航路としては最適です。このことを思えば、淡路島の未来を考えると、もう一度海上交通の重要性について見直すべきではないのでしょうか。また、海運は大量輸送にはエネルギー効率が良く、また、風などを使うことも可能であることから、今後見直されるべきでしょう。

20世紀の石油文明が終焉を迎えようとする今、神戸淡路鳴門自動車道や関西国際

空港・神戸空港に加えて、こうした海上交通が物流の主流となる可能性もあります。そうなれば、改めて淡路島が交通のメインストリートに位置する時が来るのではないのでしょうか。

## (2) 御食国<sup>みけつくに</sup>“淡路島”

淡路島は、古代から“山の幸、海の幸、野の幸”の豊かなところでした。弥生後期になると全島的に農耕が進み、その財を築く豪族が分立していたようです。また、“御<sup>み</sup>狩<sup>かり</sup>野<sup>の</sup>原”と呼ばれ、古代から天皇家が淡路島に狩りに来られていたとされています。「大鹿・猿・猪が多くいて入り乱れて山谷に満ち、炎のように起こり、蠅のように散った」と日本書紀に記されています。それほどまでに、多くの獣がいたようで、淡路島からは、獣の肉を毎年千斤という量を都へ運んだと記されています。

律令体制下の淡路島は、朝廷へ大量の食糧を貢進する国（御食国）で、「延喜式」によると、宍<sup>しし</sup>、雑魚<sup>ざさこ</sup>、塩、米、雑鮭<sup>ぞうし</sup>、蘇<sup>そ</sup>などを貢納しており、どれも良質であったようです。

水に関しても、とても良質な水があり、仁徳天皇の時代には、毎朝夕に天皇家まで届けていたといわれています。

### (食の拠点淡路島)

こうした食の豊かさに関しては、現代に至るまでずっと継承されています。温暖な気候に恵まれ、三毛作など農業技術も大変優れており、淡路島の食料自給率はカロリーベースで111%、生産額ベースでは304%です。こうした豊かな農産物は、近郊の都市へと出荷され、多くの人々の食を支えています。

いま世界はさまざまな危機に直面していると言われていますが、その最大のものが食糧の危機です。このような時代の中で、優れた農業技術と自然と社会条件に恵まれた淡路島が、これからの食糧生産をリードしていく立場になりえるのではないのでしょうか。この島の農業が持続できなければ、日本全体の農業が今後成り立っていかないとと思われるほどです。

そして、農業や漁業ほど自然の恵み(生態系サービス)を生かした産業は他にありません。また、地球温暖化の防止、生物多様性の維持など、環境保全の立場からも大切な役割を担っている産業といえます。淡路島の未来を思うとき、こうした第1次産業を軸とした社会全体の見直しを図るべきと考えます。

## (3) 淡路島のエネルギー

淡路島では、太平洋戦争以前ぐらいまでは山の幸を多く取り入れて生活していたという歴史があります。特に山は、薪などの燃料の供給地として非常に重要でした。中世には、近畿圏でも有数の都近辺への薪の出荷量を誇っていたという記録が残っています。

また、たとえば江戸時代、徳島藩は、淡路島の山林を保護するために厳しい制度を

とっていましたが、村ごとに自由に出入りできる“かせぎ山”と呼ばれる山を認めていました。

特に重要なのは、木を勝手に切ってはいけないというルールです。時代によって違う種類の木が対象になりましたが、松、クヌギなどは、その対象とされていたようです。一般の人々が山で採ることができたのは、いわゆる雑木類、枯れ枝、松葉のようなもので、それを持って帰って燃料に使っていたようです。

淡路島の山は非常に小さくて浅いのですが、中世の文書の中に「淡路は良材多し」と記されていることから、かなり質の高い材木があったと思われます。こうした良材は、当然ながら先ほど述べた海人が船を造る材料として使ったと思われます。ごく最近まで、島の中に大きな造船所がいくつもあったこともこうした史実と何か関係があるのかもしれませんが。

また、江戸時代には、菜の花から菜種油を搾って、「江戸積問屋」を通じ「菱垣回船（ひがきかいせん）」で江戸へ燈明用の油を回送していたことは、司馬遼太郎の「菜の花の沖」でもおなじみのおりです。

#### （バイオマスの持つポテンシャル）

淡路島は、今も昔も自然エネルギー（太陽、風、バイオマス（生物資源））に恵まれた土地ですが、その中でバイオマスは、農業や漁業などその土地に密着した産業の発展に貢献する性格を有しています。

今、世界中でエネルギー枯渇や温暖化が危惧される中で、淡路島の歴史を振り返ったとき、島の持つ再生可能エネルギー（特にバイオマス）のポテンシャルが相当程度期待できることを示唆しているのではないのでしょうか。

#### （４）淡路島の技術

今から約 1800 年前の弥生時代後期に鉄器を作っていたムラの跡として、大変大きな話題になっているのが淡路市の五斗長垣内遺跡<sup>ごっさかいと</sup>です。一つの遺跡で発見された鍛冶作業用の建物の数や大きさなどは、我が国最大級のものといえます。当時国内ではまだ製鉄の技術はなく、素材は国外から手に入れたものと考えられています。つまり、大変高度な鍛冶の技術が淡路島にあって、そうした技術集団が住んでいたことが明らかになりました。今回の遺跡の発見は、歴史上重要な意味を持つといわれています。

また、今の洲本市中川原からは、弥生後期に朱<sup>しゆ</sup>を大量に生産していたと思われる遺跡も見つかっています。そして地場産業の瓦ですが、淡路島は古代から瓦の産地でした。藤原京の時代には既に、都へ貢納するための瓦が大量に作られていたことが、近年、今の洲本市大野の地から古代瓦がたくさん出土し、明らかになりました。また最近では、南あわじ市八木の国分寺の近辺から古代瓦の窯跡が出土しています。

このように淡路島は、歴史的にみても先進的な技術を多く取り入れてきています。このほか、江戸時代には線香の技術が入ってきて、今も大切な地場産業として受け継がれています。また、現在の洲本市由良の漁師は、明治維新の頃から漁の折に使うテ

グス（天蚕糸）を使用していたようです。そのうち、荒テグスを磨いて太さを均一にする新しい方法を考案し、最盛期には世界一といわれるほどのシェアを占めた「磨テグス業」という産業を生み出したのです。

### （新たな産業の創出）

酪農、たまねぎなどの生産も早くから淡路島ではじまりました。島では、そうした技術を取り入れるだけではなく、改良を重ねて、より優れたものを作りあげていく技術力を有してきました。今は、島の中に仕事が見つからず、若い人が外に流出していくばかりです。しかし、こうして歴史を振り返ってみれば、何もない中で、人々は、知恵と高度な技術を持って経済を支えてきました。ここには今も学ぶべきヒントが隠されているように思います。

近年、これまでの大規模先端技術ではなく、「地域適正技術」が提唱されていますが、歴史に学んで、自然の恵みを生かした小さな生業や、外からの技術を取り入れて改良を重ねていく工夫など、適正規模で一人ひとりが生きていける仕事をたくさん興していくことで、若者の就労機会を作ることも可能なのではないのでしょうか。

## （5）水不足と水資源管理

淡路島は、瀬戸内気候のため大変雨量が少ないところです。そのうえ山が浅いので、保水力もありません。古代から、淡路島の人々は、水には大変苦勞をしてきました。雨乞いに関する記述もたくさん残っています。乏しい水の分配や、ため池の管理をするために水の所有者の連合体である「田主」と呼ばれる組織も生まれました。

また、農業用水を確保するための水路を作り、とても精密に水量を分ける丸分木まるぶんぎと呼ばれる「筒形分水装置」が置かれました。昭和初期に作られたこうしたシステムは、今もなお使われています。

### （自然の水循環に沿った利用方法）

地球の環境問題の一つに「水資源の不足」があります。もちろん淡路島では、現在も「水」の問題は、重要課題です。今は、ありがたいことに本土から長距離の導水で、こうした問題を解決するための施策がとられています。

ところが、このような大量のエネルギーを必要とする水の調達方の持続可能性には不安があります。本来は、自然の水循環にしたがって水を利用することが最も自然な姿と言えるでしょう。長期的展望に立った時、淡路島の歴史に学びながら、限られた水資源をいかに有効に活用するかという視点に立つことが大切です。それは今も昔も変わりません。当然のことながら飲料水は絶対に確保しなければなりません。その上で、こうした限られた水資源を前提に、どういった産業が淡路島にふさわしいかを考える必要があるのではないのでしょうか。

また、地域内においては、農業はもちろんのこと、小水力などの地域分散型エネルギーという視点からも水の確保が必要となってきます。できるだけ自然の水循環を乱

すことがないように、河川流域単位で利用できる水の量を把握し、流域全体での水資源管理を行うことは大切ですし、島内にある約 23,000 か所のため池を今後も地域資源として活用できるように見直すことが急がれます。

## (6) 山岳信仰からみえる自然との共生

淡路島の山は、ずいぶんと人々の暮らしを支えてきました。そうしたことから淡路島の人々は、古くから山への信仰が強かったようです。山には神々がいらっしゃると同時に、亡くなった人の魂は山に宿ると考えられていました。どんなに小さな山であっても、その麓には山の神様が何か所にも祀られています。それはほこら祠の場合もあれば、ほんの一つの石にすぎない場合もあります。

そして山に入る時には手を合わせ、山から下りる時にも手を合わせていました。淡路島の山の神様は、田の神様でもあります。山に住んでいる神様が、春になると里へ下りてきて豊作をもたらし、また秋の収穫が済むと山にお戻りになるのだそうです。さらに沼島では、漁業の神様として山の神を祀っています。沼島は小さな島ですが、島の人々は、山の木を一切切らないで山を保全していたといえます。自分たちの燃料となる薪は向かいの灘からわざわざ買いよせていました。このように淡路島の人々は、山の恵みが、自分たちの里の恵みや海の恵みをもたらしてくれているという自然の仕組みにまで気付いていたのだと思います。

### (自然の限界を考慮した人の活動)

淡路島の人々は、古代から「山に降った雨が里と田畑を流れ、海に森の養分を運び魚介を育てる。そしてその海の水が蒸発して雲となり、再び山に降り注ぐ」という大きな水の循環を知っていたのでしょう。こうした自然の仕組みが、人々の生活を支えてくれていることに感謝し、また自然そのものを守るために、信仰という形でそこに住む人々の合意形成を図り、ルールを作ったのではないかと考えられます。

もっといえば、人々は自然には限りがあるということを感じて分かっていたのではないのでしょうか。現代ではこの限界を、環境容量 (carrying capacity) と呼び、それを認識することの重要性が叫ばれています。人々は、こうした感覚を石油文明の中で失くしてしまったといえるでしょう。では、淡路島の環境容量はどれくらいでしょうか。今後、島が自立度を高めていくことを目標とするのであれば、その値を把握しておくことが大切となってくるでしょう。

## (7) 鎮守の森と文化・伝統芸能

淡路島には、鎮守の森と呼ばれる森が数多く残っています。こうした森は、神の領域とされ、決して人間が入ってはいけない、あるいは手をつけてはならない神聖なる場所として原生林が維持されている場合が多く、それは、今となっては、地域に残る貴重な自然となっています。

また“鎮守の森”は、「カミとヒトが祭りを媒体として集いあう寄合の場所であること、そして様々な芸能を奉納し、娯楽を共に楽しむ自治の場となった」といわれて

います。この鎮守の森を拠点に、多くの共有財を保有し、共同作業を担い、地域文化を形成しながら、地域共同体の機能が維持されてきました。鎮守の森の規模に限らず、どこにでもある社や祠などが、その集落の統合の象徴として機能し、集落の活力を生み出す源泉であったともいえます。

#### （新たなコミュニティのあり方を問う）

いまの社会では、こうした自然とのかかわりが薄れ、バーチャル化された物の見方がされるようになってきました。また、社会は多様化しているようにも見えますが、その半面、地域独特の文化が持てなくなり、見方を変えると「均一化」された状況があるように思います。そしてこうした状況が現代の社会病理ともいえる様々な問題を引き起こしています。それはここ淡路島も決して例外ではありません。

しかし、改めて言うまでもなく、淡路島には身近に豊かな自然があり、こうした地域独特の文化も伝承されています。淡路島らしいアイデンティティが、私たちの心の根っこには必ずあるはずです。

人と人の絆をどう作っていくか…。それは、まずはお互いの存在を認め合い、理解しながら、一人ひとりに居場所や出番を作り、支え合って生きていることが実感できるような関係を作るということではないでしょうか。そして、いわゆる鎮守の森のような新たな空間を、人格形成の場、集落の活力を生み出す場として作っていく必要があるのではないのでしょうか。

### （8）淡路島の人口の推移

淡路島の人口は、江戸時代中期に8万人、江戸時代後期に10万人、明治時代初期に17万人、明治時代末には20万人に達しました。

大正時代から昭和時代初期には、やや減少し、18万人台で推移しますが、昭和20年には233,021人に急増します。しかし、その後は一貫して減少し、平成23年4月現在14万人余りにまで減少しています。

これを全国人口に占める割合で見ると、江戸時代中期の0.4%から、明治時代初期には0.5%まで増加しますが、日本の工業化が進行すると割合を下げ、現在では0.1%となっています。

淡路島の面積（595.89km<sup>2</sup>）が国土面積（約37.8万km<sup>2</sup>）の約0.16%であることなどを考えると、農業社会の時代には、淡路島は人口扶養力の高い豊かな地域であったと言って間違いないでしょう。

そして、降水量が少ない上に、水源開発が困難な「島」という制約があったにもかかわらず、淡路島は新田開発が盛んだった江戸時代に、全国平均以上の生産性の向上を果たしているのです。そうした先人たちの努力は、全国に例を見ないため池の数に象徴されています。

#### （自然の恵みを引き出す風土と文化を活かす）

近代の工業化には適応できなかった淡路島ですが、化石燃料をエネルギーとする大

量生産社会が行き詰まりを見せる中で、かつて、農業社会の時代には、山の中にまでため池を築いて自然の恵みを引き出そうとしてきた淡路島の風土と文化があらためて脚光を浴びる可能性が出てきています。



## 第4章 淡路地域ビジョンの理念

### < 3つの理念 >

- 1 命をつなぐ“持続可能な島”
- 2 「経済」「社会」「環境」の調和がとれた新たな“幸せ社会”
  - ・ 淡路島の地域経済の強化
  - ・ 誰もが役割のある社会の形成
  - ・ 自然環境の恵みを生かした暮らし
- 3 環境立島“公園島淡路”の理念の継承と発展

### 理念1：命をつなぐ“持続可能な島”

#### — つきせぬ御世こそめでたけれ —

##### （自然への感謝と祈り）

淡路島では、365日毎日どこかで行われる“祭り”があります。それは、自然への畏敬の念や祈りを形にしたものです。また、この島には数多くの伝統芸能があります。その中でも世界的に有名な「淡路人形浄瑠璃」は、500年という長い歴史の中で一度も途絶えることなく脈々と受け継がれ、今もなおその芸を磨き、見る人の心を魅了し続けています。

ところで、この人形浄瑠璃の外題に“戎舞い”があります。古くから五穀豊穰、大漁祈願などの願いを込めて、この舞いを奉納してきました。海の幸、山の幸、そして平和な世の中と人々の幸せを願って舞う“戎舞い”は、自然の恵みへの感謝の気持ち、そして祈りの心を表しているのだと思います。

この“戎舞い”は、「つきせぬ御世こそめでたけれ」という言葉で締めくくられます。では「つきせぬ御世…」が意味するのは、どういうことでしょうか。文字通り、尽きることなく命と人の営みを繋いでいくことが「めでたき」こと、つまり「うれしいこと」、「良きこと」だと称揚しているのです。

##### （命をつなぐ持続可能な島）

戎様がおっしゃる“つきせぬ御世”すなわち命と人の営みを繋いでいくことは、まさしく命の本質です。それは、自然の大きなふところの中で、生み、育て、また次世代につないでいくことです。これこそ、近年しきりに言われる「持続可能な社会」の根底に



ある理念ではないでしょうか。

このような教えを持ち続けた淡路島で、その将来の社会のあり方を描くに当たって、こうした「命」について、しっかりと向き合うことのできるビジョンでありたいと願って、「命をつなぐ“持続可能な島”」を大きな柱の一つとしました。

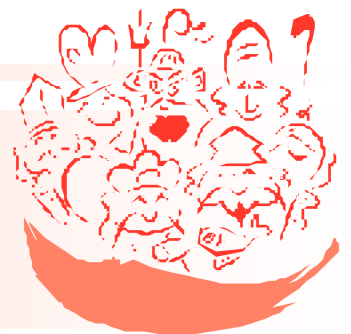
さて、「命をつなぐ…」とは、今日的には大きく二つの解釈ができるでしょう。一つは、「命」が時代を超え、世代を超えてつながるという“縦のつながり”です。そしてこれは、命の過去も未来も同じ価値を持つことを意味します。もう一つは、命は、いまを生きるあらゆる生き物のそれと、すべて繋がっているという“横のつながり”です。この国では、6世紀に伝来した仏教と、それ以前の日本的なアニミズムとが融合した、独特の仏教思想が発達しました。それを象徴的にうたったのが、一木一草にもすべて仏性が等しく備わっているという「山川草木」の思想です。

この世にあるものすべての命は、自然界の輪廻と循環の中で、全体が繋がり合って命をつないでいる。多様な命が存在してこそ人間もまた生かされているということを示唆しています。このことは、最近その重要性が叫ばれている「生物多様性」の概念と、通底するものがあるでしょう。

忘れてはならないのは、この“縦、横”の二つのつながりがなければ、決してこの地上の命の存在そのものがあり得ないということです。

これから私たちは、そうした命の成り立ちの原点に立ち返って、淡路島のビジョンを考えるべきではないかと思えます。また、今の時代だからこそ、こうした命の大切さを、次世代を担う子どもたちに改めてしっかりと語り直す時ではないでしょうか。

「つきせぬ御世こそめでたけれ」…とても大切なことを、戎様はずっと私たちに伝えてくれているのです。



## 理念 2 : 「経済」「社会」「環境」の調和がとれた新たな“幸せ社会”

### —本当の幸せとは—

#### (価値観の変化)

戦後の貧しい時代は、経済力をつけて生活の物的基盤を作ることに一所懸命でした。

ところが先進国と肩を並べるようになってきた 1970～80 年代になると、物的にも相  
当に満たされ、「幸せ」の中で、モノの豊かさが幸せの中で占める割合が次第に小さく  
なってきたのは当然のことだといえるでしょう。心の豊かさを重視する人が、モノの  
豊かさを重視する人の割合を上回ったのは、1970 年代後半のことです。そんな国全体  
の状況の中で、淡路島に住む私たちも、新たな価値を探っていく時代になっているの  
ではないでしょうか。

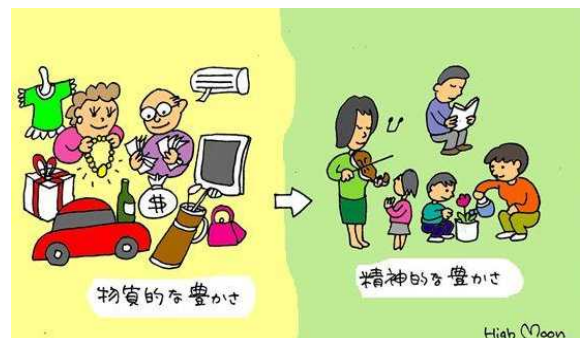
たとえば、子どもたちの生活に目を向けてみましょう。時代が経済的に豊かになる中  
で、子どもたちは「立身出世」に価値を見いださなくなって、積極的に生きていこうと  
いう意欲が薄らいできています。それにもかかわらず、親たちは、子どもを幸せにする  
ということは、学歴をつけて、社会的、経済的な地位を高めるように育てていくことだ  
と考えてきました。そうした状況は今もなお続いています。そして、ここ淡路島からも  
できるだけ高等教育を…と、子どもたちを島から送り出してきました。また、子どもた  
ちも都会にあこがれ、島を出ていくようになりました。それが、若者の島外への流出を  
増加させてきました。

ところが今は、高い学歴があるからといって、必ずしもいい就職先があるとは限りま  
せん。非正規雇用などが増えて格差が拡大し、それが固定されつつあるような社会にな  
ってきました。そのような中で今求められているのは、既成の価値観にとらわれた中で  
仕事を選ぶのではなく、新しい時代の中で自らがやりがいのある仕事の道を切り開くこ  
とのできる力なのかもしれません。またそうした若者が未来に希望を持って新たな生き  
方を見いだせる場を、ここ淡路島に用意することが必要なのだと思います。ここに、教  
育の重要性と、未来を拓くカギがあるの  
ではないでしょうか。

#### (「物の豊かさ」の追求は困難)

価値観が変化してきた一つの理由とし  
て、地球資源と環境容量の制約を人々が  
意識し始めたこともあるでしょう。

近年、世界中で人類持続の危機を避け  
るために、これまで無限であると考えてきた「自然の恵み」が有限であることを明確に  
意識し、その限界を定める国際的な取り決めなどの努力もされています。まだ具体的  
な値が合意されてはいませんが、いずれそれが世界で共有されることになるでしょう。こ  
のような地球資源と環境容量をしっかりと踏まえた上で、人間の活動量を見直すべき時



期にきていると言えます。

こうした制約を、すでに多くの人々が意識し始めていることは間違いありません。つまり、物の豊かさをこれ以上追求することは、もはや不可能であることを実感したことが、「モノの豊かさ」から「心の豊かさ」を求める人の数が増えている一つの理由でしょう。

#### (子どもの幸せがみんなの幸せ)

「こどもがしあわせなとき それはみんながしあわせなときだもの」…。これは、『サンタクロースってほんとにいるの?』(てるおかいつこ著、すぎうらはんも絵、福音館書店、1982)という絵本の締めくくりの言葉です。この本の作者は経済学者ですが、そのような視点からこの言葉が語られたことの意味は深いと思われます。

確かに、その国が子どもたちに対してどれほどの関心を持っているかで、その国の本当の状態を示すといわれています。このように、子どもの目線に立つことはとても大切であることを強調しておきたいと思います。

#### (幸せの三つの要素とバランス)

さて、私たちが幸せを感じる際の要素は、大きく三つです。それは「経済」、「社会」と身の回りの「環境」です。この三つが合わさって、はじめて「幸せ」を実感できるのだらうと思います。たとえば、お金がたくさんあって、どんなに大きな家に住んでいても、喜びを分かち合う人がいなければ、幸せといえるのでしょうか? 一方、家族と一緒に暮らしていても、着る服もなく、今日食べるものもない状態でも、幸せとは言えないでしょう。地球資源と環境容量の制約の中で、「幸せ」を最大化するために、この三つの要素のバランスをどうとるのが課題でしょう。

幸せの中身は、時代の変化やそこに住む人々の価値観で変わってきます。近い将来、地球資源が限界を迎えると、今までのような暮らし方、生活スタイルそのものを変える必要性が必ず出てきます。もし、これまでの豊かさに関する価値観が変わらなければ、そのような限界は大変窮屈なものと感じられるでしょう。しかし、モノにあまり依存しないでも幸せであると思える価値観が変わっていれば、地球資源と環境容量の制約が厳しくなっても、それを新たな幸せ社会づくりの動機づけとして、前向きに進んで行けるはずです。

そうした未来を見据えた社会変革が、ここ淡路島にも近い将来、必ず求められる時がくるでしょう。では、どうすれば「淡路島に生まれてよかった」、「淡路島に住んでいてよかった」と感じられるような、「幸せ」が実感できるのでしょうか。

## （「経済」「社会」「環境」の調和がとれた新たな“幸せ社会”）

今回のビジョンの改訂では、淡路島民の「幸せ」の価値を、淡路島独自の「幸せ指標」を使って見直してみることにしました。なぜ「幸せ指標」を新たに設けてまで価値観の変化を見直すことにしたかという、それは淡路島の現状と課題の中に理由があります。

県民意識調査によると、淡路島民は、今の生活に満足していないと答えた人の割合が残念ながら県下で最も多いという結果がここ数年続いています。詳しい調査をしていませんので、その中身まではわかりませんが、今が「幸せ」ではないと感じている人がたくさんいるということは間違いのないようです。その上、自殺率も県下で一番高い地域となっています。必ずしも不幸せと自殺率の因果関係がはっきりしているわけではありませんが、無関係とは決して言えないでしょう。

こうした状況を考えると、淡路島民の不幸せ感はとても深刻な問題です。今後その原因について詳しい調査を進めるとともに、何としてもその改善を図る必要があります。特に今回は、子どもたちの生活状況にも目を向けなければならないと考えています。経済、社会、環境の調和を大切にする価値観を共有し、子どもたちがやりがいのある仕事に希望を見だし、幸せを実感できる社会を実現していかなければなりません。

以下は、「経済」、「社会」、「環境」のそれぞれの要素ごとに“幸せ社会”のあり方を提案します。

### 1 「経済」～淡路島の地域経済の強化～

“幸せ社会”をめざす要素としての「経済」のあり方については、三つの視点から「淡路島の地域経済の強化」を提案します。

#### （グローバル経済との適切な付き合い方）

淡路島の経済は、データが示すとおり、ここ10年で下降線をたどってきました。時代はグローバル経済へとその市場が広がっていく中で、地方はどうあるべきかが問われています。そんな中での今後の淡路島の経済戦略の一つ目は、グローバルに外から富を獲得できる優位な産業、ビジネスモデルを作ることです。近年、淡路瓦は中国へ、淡路線香はヨーロッパへとシェアを拡大しています。また、食においては「御食国」であったこの島にふさわしく、たまねぎ、ビーフなどのブランド化が進み、付加価値をつけて売り出そうと、たゆまぬ努力が続けられてきています。また、「淡路島牛丼」などの新たな名産を開発し、観光などに結び付ける努力をしています。

こうした動きの中に、淡路島の大きな可能性を見出すことができます。このような外資を獲得する努力は、今後もより良い経済発展を目指して推進していくべきだと考えます。それと同時に忘れてはならないのは、外部から淡路島が必要とする不可欠なものを上手に購入する知恵がいるでしょう。

### (働き方の新しい価値観への転換を…)

さて、二つ目ですが、それは淡路島をまるごとブランド化することです。そして、ここに来ないと手に入らない、見ることができない、体験できない、感じることをたくさん作ることでないでしょうか。それが小さなパン屋さん一軒でもいいし、おしゃれな農家民宿でもいいのです。この島に住む私たちが、豊かな自然の恵みや地域の歴史、文化などを生かしながら自分の価値観を自分で見つけて、自分に合う生き方を楽しみながら起業する。あるいは、できるだけ地域の素材を使って、身の丈にあった技術（適正技術）で、ものづくりに取り組んでみる。食材豊富な淡路島で、その素材を生かした加工品を作ることや、こだわりのお弁当屋さんを作ってみることもいいかもしれません。これが、働き方あるいは生き方の新しい価値観への転換といえるでしょう。

今後、人口減少、超高齢化社会を迎える中で、徳島県上勝町の「葉っぱビジネス」にならって、社会的弱者といわれる方々も本人が望むのであれば、積極的に生産活動に参加できる仕組みをつくるべきだと考えます。それが、見方を変えるとその人にとっての居場所となり、出番があるということが生きがいにつながるはずで、それが取りも直さず、「経済」と「福祉」が融合した、新たな幸せではないでしょうか。

### (地域内循環経済のすすめ…)

三つ目は、消費者側の問題です。最近、みなさんはどこで買い物をしていますか？利便性や価格を考えて、島外資本の大型店舗で買い物をしたり、島外へ買い物に出かける機会も増えたことだと思います。

ところが、街を見渡してみると地元の商店街は、どこも元気がありません。地域の小さな雑貨屋さんは次々と店じまいをしてしまいました。ちょっと買い物に行くだけでも車に乗って出かけなければなりません。こうした状況が、過疎地では買い物難民を生み出しています。地域の工務店や大工さんなどの技術者も、ずいぶんと出番が少なくなってきました。まちの活性化を図るとき、こうした消費者側の役割は、とても大切です。できるだけ地産地消を推進していきたいものです。

また、生産者側においても、自らのものづくりの原材料を外部から購入していることが課題としてあげられます。地域に無い素材は仕方ありませんが、可能であれば地域の素材を使うことで地域の経済循環を活性化することができます。また、モノだけではなくサービスも今後の課題です。高等教育、エネルギー、医療などのサービスについては、特に外部に流れる富が大きいので、それをできるだけ内部で賄う工夫も必要です。そのための自前の教育機能、自給的なコミュニティ経済の拡大、さらにはコミュニティファンドや地域通貨といった新たな金融の仕組みの工夫もありえるでしょう。

つまり、淡路島から外部に過大に流出している富が、様々な側面で内部で循環する仕組みをつくることです。こうやってお互いに支え合い、つながって生きていることを実感できることもまた、地域力を高めることになるのです。

## 2 「社会」～誰もが役割のある社会の形成～

“幸せ社会”をめざす要素としての「社会」のあり方については、「誰もが役割のある社会の形成」を提案します。

### （役割があるということ…）

まずここでいう「誰もが役割のある」ということは、すべての人がそれぞれに居場所があり、出番がある状態を指します。もっといえば、「そこに“あなた”が存在する、そのことだけで尊い」ということを意味するものです。それは、先に述べたように「生物多様性」の重要性を理解するのとまったく同じことだといえます。このことは、一つには、地域の中でお互いを分かり合い、助け合い、支え合うことができるコミュニティの根源だといえます。互いの存在価値を理解してこそ、本当の意味で、支え合う社会が構築されます。

またもう一つには、自分が自分を大切に思う自尊心を育てることでもあります。自分を大切にできない人は、決して他の人を大切には思えません。そこで、「誰もが役割のある」社会を築くことで、その存在価値をより際立たせ、それぞれの居場所を生み、地域との緩やかなつながりを持つことで、一人ひとりの生きがいへとつながるのです。

こうしたことを理念とすることの背景には、近年の社会構造の中で浮き彫りにされてきた、個人や家庭の地域からの「孤立」があります。淡路島において第一に挙げられるのは、今後さらに進行すると予想される独居高齢者の増加です。また、児童虐待やひきこもり、自殺者の増加など「孤立」から派生するこうした課題の背景には、当たり前の家族単位の絆が薄れてきていることが挙げられます。そしてそれに伴い、本来この島にあった村単位の相互扶助的な仕組みも崩れつつあります。残念ながら、課題は多くあります。

これからは、一人ひとりの存在価値を互いに見いだしながら居場所をつくることと、それぞれの地域が「自助・共助・公助」を進めていくことが求められます。

### 3 「環境」～自然の恵みを生かした暮らし～

“幸せ社会”をめざす要素としての身の周りの「環境」のあり方については、「自然の恵み（生態系サービス）を生かした暮らし」を提案します。

#### （人と自然の関係）

この10年の間に、淡路島においても、大切な命を脅かす状況が生じてきています。

まず、私たちの生活そのものを支える環境の劣化です。例えば、淡路島の里山ではシカなどの野生動物の食害による森林の荒廃が問題になっています。まだ明らかではありませんが、このような里山の荒廃が、山の保水力の低下、河川や海への影響、あるいは土砂災害などをもたらす可能性は十分に考えられます。

こうした状況は淡路島だけではなく、日本各地で同じような問題が起こっています。ただ、他地域と大きく違うところは、淡路島が文字通り“島”であることです。狭い範囲で自然と人が共存しているために、山の異変が、里の生活や身近な環境にすぐに影響します。逆にそれは、私たち人間の営みがそのまま自然環境に影響するということでもあります。このような人間活動と自然環境の密接な関係は、私たちの生活環境への直接的な悪影響はもちろんのこと、森林の生態系や生物多様性の変化を通じて、間接的に私たちの生活に跳ね返ってくる危険性をはらんでいます。地球温暖化などと並ぶ大きな環境問題であり、私たちの命に係わる問題といえるでしょう。

#### （日本人の自然観）

では、私たちはこうした問題とどう向き合うべきなのでしょう。

一つには、理念1で述べたように、日本人の本来持っていた「自然観」を見直すことです。単純な自然保護の考え方では問題は解決しません。日本的あるいは東洋的な自然観が今後文明をリードすべきであると考えられる学者も多くいます。だから「人と自然の共生」という概念を正しく理解することがその一歩といえます。

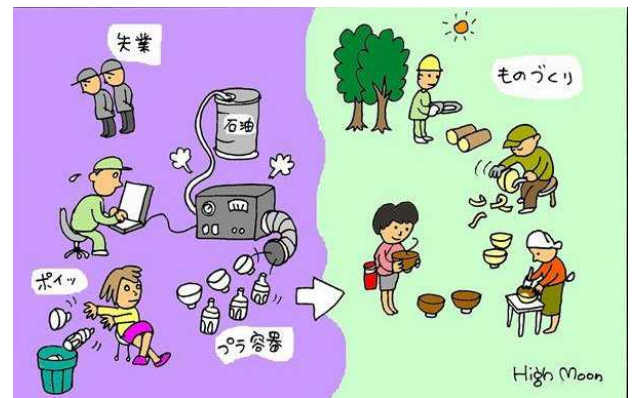
日本では、「自然（しぜん）」という字は「自然（じねん）」と読み、「おのずからそうあること」、「あるがまま」という意味でした。人は、自らを道端の石ころや草や木と同等の命であると捉え、決して感謝の気持ちを忘れることはありませんでした。それがいつの間にか人は、自然の中で生かされているという感覚を忘れ、人間中心の世界観が広がっていきました。自分たちにとって都合のいい便利さや利益ばかりを追い求めた結果が大きな環境問題となって、私たちの生活にふりかかっていると言えるのではないのでしょうか。

#### （自然の恵みを生かした小さな生業）

二つ目は、この島の歴史に学びながら自然の恵み（生態系サービス）を活用した小さな生業を作り出していくことです。

もともと私たちの先祖は、生活の場として開いた里の後背地を有効に活用してきました。薪炭材などのエネルギー資源の伐採、山菜や筍、マツタケなどの採集、また、

シカ、イノシシなどの狩りもしてきました。こうして、限られた農地だけではまかないきれない資源を、狩猟採集という生活様式を取ることで補ってきたといえます。こうして二次林が発達し、里山が知らず知らずのうちに保全されてきました。ただし、それは人が自然への畏敬の念をもって、身の丈にあった技術（地域の適正技術）を用



い、必要な分だけを使い、そのあとの再生を待つという仕組みに基づいていました。そしてその仕組みを支えてきたのが「社会資本」とよばれる社会の信頼関係、規範、ネットワークであったと考えられます。そしてこれらを心豊かに継承していくための仕掛けとして、伝統的な祭礼や芸能を育んできました。自然との新たな付き合いが求められる今こそ、こうしたライフスタイルを見直すことが必要でしょう。

#### （自然の持つ癒しの力）

また、自然の恵み（生態系サービス）は、水や空気、食糧などの物質面だけではなく、精神面からも人の魂や心という深い内面（スピリチュアルな側面）にも影響を与えてきました。近年の医療の世界でも、自然治癒力が注目されつつあります。先進国においては、過度の精神的ストレス、飽食、運動不足といった生活スタイルが、さまざまな生活習慣病を引き起こしています。こうした病気の治療など医療分野において、自然との触れ合いは不可欠なものであり、自然の中にその身を置くことで、他者・自然・万物との調和やつながりを実感でき、内面の充実によって前向きに生きようとする力を生み出すことができるのではないかとされています。こうした自然の持つ癒やしの力は忘れてはならない自然の恵み（生態系サービス）の一部といえるでしょう。



## 理念 3 : 環境立島 “公園島淡路” の理念の継承と発展

### (人と自然の豊かな関係をきずく)

これまで述べてきたように、無尽蔵にあると思われていた自然資源には限りがあり、人間活動によって地球環境が破壊され、人類の持続可能性が脅かされつつあるとの共通認識が定着しつつあります。

21 世紀に暮らす私たちは、近代社会が誕生する以前の暮らしに戻ることはできません。しかし、自然環境を酷使する 20 世紀型の技術と経済・社会システムを脱却し、人と自然の豊かな関係を再構築（創造）できる新しい技術や経済・社会システムを導入することは可能です。

今後の地域づくりは、生物多様性や循環する自然環境を大前提として、全ての分野において、自然の恵みを活用した 21 世紀型の「豊かさ」を実現していくべきであると考えます。

### (環境立島「公園島淡路」の理念)

従前ビジョンに掲げた「環境立島」は、人と自然の新たな関係を作り出す精神（文化）の確立と科学技術の開発と導入による地域社会の再創造をめざすものです。そして、淡路地域ビジョンが目指す「環境立島 “公園島淡路”」は、まず自然環境を守り、自然環境と調和した産業や経済活動が成り立っている中で、様々な人が交流し、さらに新しく創造的な文化や産業が生み出されていくような地域像なのです。

こうした「公園島」の考え方は、1985 年（昭和 60 年）に大鳴門橋の開通を記念して開催された「くにうみの祭典」に遡ります。1994 年（平成 6 年）には、この考え方に基づいた総合的な地域開発計画として「淡路公園島構想」が策定されました。

この構想は、淡路島の全域において、豊かな緑、美しい景観、伝統ある歴史と文化、特色ある地域産業などの特性に磨きをかけ、自然環境と調和した、アメニティ豊かな生活空間の形成と、世界に開かれた賑わいのある多彩な交流空間の形成をめざすものです。

具体的な地域づくりのイメージは次のとおりです。

- ・ 緑豊かな自然、青い海、白い砂浜、美しい田園風景が広がり、「くにうみ神話」に彩られた歴史と文化、伝統技術に培われた個性豊かな地域産業が息づき、農畜水産業がたくましく展開する島
- ・ 地域住民が、いきいきと生活し、「ここに生まれてよかった。住んでよかった。」と実感でき、国の内外から訪れる人々が、地域や世代を超えて交流し、感動を分かちあい、「また来たい。住んでみたい。」と実感できる地域

2000 年（平成 12 年）には、その成果を世界に発信するため、淡路花博「ジャパン フローラ 2000」が開催されました。そして、2010 年（平成 22 年）、淡路花博 2010 花みどりフェアが開催され、「人と自然のコミュニケーションからコラボレーションへ」の理念が提示されました。

ビジョン策定後は、この“公園島”に、環境立島という考え方を加えて、地域ビジョ

ンの推進という形で取組が進められてきました。今日の淡路島の姿は、25年にもわたる官民一体となった取組の成果であり、人と自然が協働することで新たな人と自然の関係をきずく「環境立島『公園島淡路』」の理念は、環境問題が世界的な最重要課題となっている今日においてこそ、なお一層その輝きを増しているのです。

私たちは、今回のビジョン改訂に際し、この理念の継承と発展をめざします。



## 第5章 淡路地域ビジョンの目標

### 1 目標

<目標>

## 環境立島あわじ

～人と自然の豊かな関係をきずく“公園島”へ～

今回のビジョンの改訂では、大きく3つの理念を柱としました。

まず大前提として「命をつなぐ」こと、つまり持続可能な社会を目指すことを第一に掲げることとしました。

第二に、これまでの価値観を見直し、経済、社会、環境の調和を大切にする価値観を共有し、誰もが「幸せ」を実感できるような淡路島を目指します。

第三は、環境立島“公園島淡路”の崇高な理念を改訂版のビジョンでも継承し、今後とも発展させていきます。

そしてこれら3つの理念をもとに、改訂版淡路地域ビジョンの目標を「環境立島あわじ ～人と自然の豊かな関係をきずく“公園島”へ～」としました。

### 2 実践目標と行動指針

国生みの島である淡路島の歴史を振り返り、淡路島が持つ可能性を引き出してみました。この大きな目標を支えるための柱として、4つの実践目標を以下に掲げます。

<4つの実践目標>

実践目標1 誰もが役割を持ち、地域の宝が生きる島づくり

実践目標2 個性と活力にあふれ、新たな価値を生み出す島づくり

実践目標3 自然とのつき合い方を再考し、その恵みに支えられた島づくり

実践目標4 経済、社会、環境が調和し、命をつなぐ島づくり

## **実践目標1：誰もが役割を持ち、地域の宝が生きる島づくり**

私たちは、地域における「参画と協働」を進め、地域の担い手、ビジネスリーダー、オピニオンリーダーなど淡路島の未来を託せる人材を育てます。

そして、それぞれが持つ「知恵」、「技術」、「個性」、「郷土への誇り」を活かし、すべての人々に役割や居場所があり、生涯、現役で暮らせる島を目指します。

また、家庭においても、地域においても、一人ひとりが大切にされ、お互いに助け合い、支えあって生きていることが実感でき、「自助」、「共助」、「公助」のバランスがとれた島を目指します。

### **【行動指針】**

#### **(教育・文化)**

- 1 精神的にも体力的にもたくましく、個性輝き、命のつながりを大切にする子どもたちを育てます。
- 2 地域の人、モノ、自然、歴史を学習し、それらを活用します。
- 3 伝統的な文化を継承、発展させます。
- 4 芸術を振興し、新たな文化を創造します。
- 5 生涯学習・生涯スポーツを推進します。
- 6 災害の記憶や記録を継承し、災害に強い地域社会を構築します。

#### **(健康・福祉)**

- 7 年代層に応じた健康を増進する取組を進めます。
- 8 子育てを地域で支援できる仕組みなど、安心して出産し、子育てのできる環境を整えます。
- 9 一人暮らしの高齢者や過疎地域でも、安心して暮らせる医療・福祉システムを構築します。
- 10 高齢者や障害者などの事情に対応し、男女の別なく、誰もが個人として尊重され、生きがいを持てる柔軟な就労機会や社会参加の機会を増やします。

#### **(まちづくり・地域づくり)**

- 11 花とみどりにあふれ、淡路島らしい景観やアメニティの豊かな地域空間を創造します。
- 12 全島一斉清掃や漂着ゴミの清掃作業を推進し、ゴミのない美しいまちを作ります。
- 13 誰もが安全で安心して暮らせるまちづくりを進めます。
- 14 交通弱者に優しく、環境負荷の少ない地域交通をつくります。
- 15 孤立せず、繋がりのある生活を可能にするコミュニティや住環境をつくります。
- 16 ボランティア活動、地域づくり活動を促進し、社会的企業を育成します。
- 17 異文化交流を積極的に行い、異文化理解を促進します。

## **実践目標2：個性と活力にあふれ、新たな価値を生み出す島づくり**

私たちは、淡路島の歴史や文化に育まれた地域資源を生かし、地域内外との連携をとりながら、新たな価値観と豊かな発想で付加価値の高い産業を生み出していきます。

また、若者が就労できる機会を様々な形で整え増やすことと、一方で、自らが自分に合う働き方（生き方）を見だし、適正規模で一人ひとりが生きていける小さな生業を興していくという主体的な行動を支援していきます。

もう一つ大切なことは、地産地消などできるだけ地域内で消費し、淡路島から外部に過大に流出している富を内部に循環する仕組みづくりを進め、お互いに支え合い、つながって生きていることを実感できることで、より地域内経済の循環を活性化し、地域経済の自立を目指します。

### **【行動指針】**

#### **（地域の経済循環）**

- 1 物品やサービスの地産地消の取組を進め、地域経済の循環と産業の競争力向上を図ります。

#### **（地域産業の振興）**

- 2 多様な形態の農漁業への就労について検討し、新規就業者を積極的に受け入れる仕組みを作るとともに、新しい農と食の展開に向けた人材育成に取り組みます。
- 3 食のブランド化の取組を進めるとともに、地域の食材と文化を生かした「食の文化」を創造し、発信します。
- 4 農林水産業の6次産業化や食と農を生かした国際的な交流拠点づくりを進めることにより農林水産業を振興します。
- 5 地場産業を再評価し、新しい時代に適合した展開を図ります。
- 6 地域に適合した新しい技術を積極的に導入し、地域産業の競争力を高めます。
- 7 おもてなしの心を持って、国内外の旅客の受入態勢や交流基盤を整え、観光客や国際会議の誘致を進めます。
- 8 都市住民との交流やグリーンツーリズムを促進します。
- 9 スローライフな田舎暮らし、淡路島らしい自然と共生する暮らしを提案し、定住・交流人口の増大をめざします。

#### **（新産業の創造）**

- 10 地域内外の連携による創造的な取組を促進し、新産業の育成を行います。
- 11 環境配慮型企业や農業関連企業を積極的に育成、誘致します。

### **実践目標3：自然とのつき合い方を再考し、その恵みに支えられた島づくり**

私たちは、自然への畏敬の念や命のつながりを自覚するとともに、阪神・淡路大震災や台風による風水害、そして、東日本大震災の教訓を深く記憶にとどめ、これからの生き方、暮らし方に生かしていきます。

また、自然に恵まれた淡路島の価値を生かした地域づくりを進め、グリーン経済を振興するとともに、環境を生業とする「グリーンカラー」と呼ばれる人材を生みだし、育てていきます。

さらに、あらためて自らの「命」を支える豊かな自然の価値を認め、次世代へと伝えることが重要です。このため、多様な生態系を社会的、経済的、さらにはスピリチュアルな視点から評価した上で、地域適正技術の活用により、人と自然が協働（コラボレーション）することで、新たな人と自然の共生空間の形成をめざします。

\* **グリーン経済：** 環境保全や持続可能な循環型社会などを基盤とする経済

\* **グリーンカラー：** 代替エネルギーやリサイクルなどの環境産業に従事する労働者を表す言葉。ホワイトカラー、ブルーカラーを真似た表現

#### **【行動指針】**

##### **（人と自然）**

- 1 自然への畏敬の念や命の循環を学ぶ機会をつくります。
- 2 住民や企業による自然の保護・再生活動を推進します。
- 3 「環境立島淡路」島民会議により推進されている島民運動に積極的に参加します。
- 4 外来種の駆除、自生種による緑花活動、放置竹林や里山・里海の整備など生態系の多様性を保全する取組を進めます。
- 5 過去の教訓を生かし、ハードとソフトが一体となった防災・減災の地域づくりを促進します。

##### **（エネルギー・資源）**

- 6 エネルギー自給と自治を目指して地域内生産を促進します。
- 7 エネルギー消費構造の変革を進め、積極的に低炭素化を推進します。
- 8 ごみの減量と資源循環を進めます。

##### **（自然の恵みと生業）**

- 9 自然の恵み（生態系サービス）を賢く使う取組を進めます。
- 10 自然、歴史、生活、文化に育まれた淡路島らしい景観を、新たな技術を導入して守り育てます。
- 11 新たな地域適正技術を研究し、淡路島の自然素材や伝統技術を元に生業（なりわい）を生み出します。

## 実践目標4：経済、社会、環境が調和し、命をつなぐ島づくり

私たちは、常に経済、社会、環境の調和について関心を持ち、真の幸せ（豊かさ）が実感できる、淡路島らしい暮らしを実現するための「仕組み」をつくります。

また、ビジョンの実践過程とその成果を、“新たな国生み神話”として島内外あるいは世界に広く発信し、外部からの意見などを採り入れ、次のステップに生かしていきます。

### 【行動指針】

#### （学ぶ）

- 1 経済、社会、環境の調和について、暮らしの中で意識し、学び、ともに考える機会を増やします。

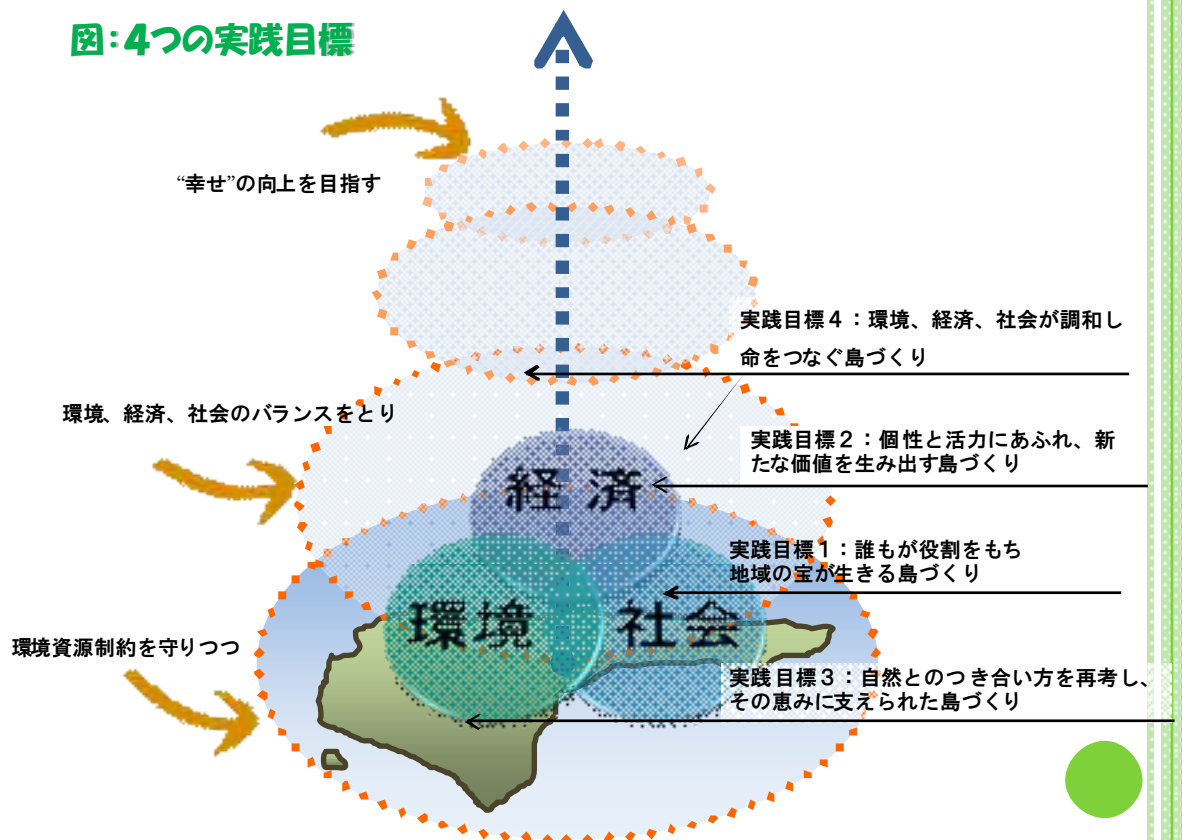
#### （つくる）

- 2 地域の自然や文化に適合し、環境に優しく、淡路島らしい暮らしを実現するための制度や仕組みを生み出します。
- 3 淡路島と同様のビジョンを持つ国内外の地域と、国際的なネットワークをつくり出します。

#### （発信する）

- 4 ビジョンの取組をフォローアップし、実践過程や成果を国内外に発信します。

図：4つの実践目標



## 第6章 ビジョン実現のためのポイント

### 1 淡路地域ビジョン実現のポイント

- ① ビジョンの普及と共感
- ② あらゆる主体の参画
- ③ 行動や事業に応じた適切な協働と役割分担
- ④ 実現を支援する「仕組み」の構築
- ⑤ 的確なフォローアップ（評価、見直し等）

### 2 あわじ環境未来島構想との関係

あわじ環境未来島構想は、ビジョンと軌を一にしており、このビジョンを実現するための強力なツールとして位置づけます。

### 3 参画主体の協働への期待

協働効果が高く、協働でなければ実現困難な事業を中心に整理します。

#### （1）住民全般

依存意識や固定観念から脱却し、自己責任のもとに自律的なライフスタイルを確立し、「公」領域への参画・協働等を行い、新たな行動をおこしていくことが求められます。

#### （2）自治組織

淡路島を島内に約50あるムラ（昭和の大合併の前の旧村であり、多くは大字や小学校区として現存する）の連合体と位置づけ、自治会等の組織から行政分野を横断したものに再編し、行政から権限と財源の移譲を受けて、ムラ単位での地域コミュニティの核としての機能を発揮することが期待されます。

#### （3）ボランティア団体（NPOを含む）等

- ボランティア団体等は、行政だけでは実現が難しい領域を中心に、実働的な役割を担っています。例えば、現在、淡路島には約600団体の花づくりグループがありますが、そのような身近な取組にも、淡路島づくりに大きく貢献することが期待されます。
- 専門的な知識や技術を持った組織としてのNPO等は、淡路島の新たな地域づくりの主体として、行政からの受託による協働事業や再編された自治組織等の支援や活動コーディネート、高齢者の技術継承の機会創出など、多様な役割を担うことが求められます。



#### (4) 企業・産業界

- 地域の価値を高めるために、農漁業が産み出す豊かな素材を活かすことが重要です。「淡路島に来なければ本物は味わえない」という流通の確立が、淡路島ブランドの構築に貢献します。
- 全島的な観点から、保健・医療・福祉の一元化や、通所介護、訪問看護、グループホームなどのサービス拠点の効率的な配置を推進することが重要です。
- 介護や地域福祉の担い手として、元気な高齢者がサービス供給者として積極的にかかわることが求められます。
- 交通分野では、公共交通の連携の悪さが指摘されて久しくなります。高齢社会では自家用車による移動は後退せざるを得ません。生活インフラとして交通基盤の整備が不可欠です。
- 重要産業である観光業は、農漁業や地場産業などとの連携が淡路島を活性化する原動力となります。観光とは「光を観る」ということで、淡路島は「光」の宝庫です。輝く海、澄んだ空気や花と緑、穏やかな心の人たち、全島民がこの島の魅力を国内外に発信することが大切です。
- 産業全般に関しては、企業を積極的に誘致し、特に健康・福祉、環境関連産業の活性化を推進していくことが求められます。

#### (5) 学校・教育・研究機関

- 淡路島としての地域教育の充実が急務です。地域学としての「淡路学」の学習機会を広め、淡路人としての誇りや生き方を伝え、地域文化や倫理教育の核とします。
- 教育は学校がするという発想の中、学校への期待が過大になりつつあります。家庭と地域と学校が相互に補完し合いながら教育機能を分担する「教育の地域化」を柱とした公教育の組み替えが必要です。
- 淡路景観園芸学校は、淡路島で初の本格的な高等教育機関であり、実質的な指導者の養成が期待されています。今後は、「世界を見据えつつ、地域に根ざして活動する」人材の育成と、淡路島づくりの総合的なシンクタンク機能を果たすことが望まれます。
- 食と農、観光、環境など淡路島の特性を生かした高等教育機関や研究機関などの整備が望まれます。

#### (6) 行政

行政にしかできない機能に純化して、住民の自治組織などにアウトソーシング(外部委託)することを考え、住民との関係を再構築することが求められます。同時に、情報公開により意思決定プロセスを透明化するとともに、説明責任を果たすことで、住民本位の行政を実現するような体制に改めることが必要になります。

統合された3市は、その強化された行政機能を十分に発揮し、主体性を持って地方行政を推進していく必要があります。

また、淡路島共通の広域的課題について、一丸となって取り組むためのさらなる体制の充実が求められます。県は、市の主体性を尊重し、市とは異なる行政分野で機能を発揮しつつ、対等のパートナーシップで連携しながら淡路地域の振興を図っていくことが必要です。

## 4 ビジョンのフォローアップ

### (1) 点検、見直し、補完の必要性

淡路地域ビジョンは、淡路島を取り巻く環境の変化や、淡路島の解決すべき課題を踏まえ、淡路島のあるべき将来像を提示することを主眼としています。

今後も、淡路島を取り巻く社会経済情勢は大きく変化することが予測され、また、淡路島民の価値観にも変化が起きることが予測されます。

このたびまとめた「改訂版淡路地域ビジョン」は、時代の変化に応じた柔軟な点検、見直し、補完、すなわちフォローアップが不可欠です。

### (2) 普及と参画に向けて

ビジョンづくりやフォローアップに成果をあげた「地域夢会議」のように、直接島民から意見を聴取し、かつ実践を促す仕組みを今後も継続的に開催するなど、地域の課題や島民のニーズの把握と、参画の拡大に努めることが重要です。さらに、実践活動を行っている人たちの連携の仕組みをつくり、「地域夢会議」や「淡路地域ビジョン委員会」の活動と組み合わせることで、より大きな効果が期待できます。

子どもたちのビジョンへの理解を促すため、「総合学習」の時間等の活用も必要です。伝えるだけでなく、子どもたちの視点から、ビジョンの検証も期待できます。

県と市が一体となり地域ビジョンを実現するためには、ビジョンで示した社会像や実現方向を、県及び市が具体的な地方行政を進める際の指針とする必要があります。

フォローアップの過程では、インターネットなどを通じた分かりやすい形での積極的な公表、また島内だけでなく島外からの視点による継続した検証も必要です。

### (3) 「PDCAサイクル」の体制づくりと実施

多くの思いを集め創りあげた「淡路地域ビジョン」の実効性を高めるためにも、前述した様々なフォローアップを集約し、いわゆる、PDCAサイクル「P（計画）→D（実行）→C（評価）→A（改善）」を実行する組織を設置し、「地域ビジョン」ならではの実施方法を確立することが重要です。

## 第7章 目標の指標化による検証

### 1 指標設定の考え方

#### (1) 「幸せ」の定義とその「要素」

近年、経済的な豊かさに加えて多様な豊かさが求められているといった場合、その「多様」の中身とはどのようなものでしょうか。

これは、経済的豊かさが「モノの豊かさ」と呼ばれるのに対して、「心の豊かさ」と呼ばれるものです。それは通常「社会」と「環境」という二つの分野に整理されます。この三つ（経済、社会、環境）のそれぞれの豊かさを総合したものを、ここでは「幸せ (well-being)」と呼ぶことにします。

ところで、「幸せ」と言った場合、人々の主観的な“満足度”を指します。では、その満足度を高めるためには、それぞれの分野（または要素）の何をどう変えたいのかが分からなければなりません。そのために、それぞれの分野の指標が必要になります。

まず、「経済」ですが、これはGNP（国民総生産）とかGDP（国内総生産）などが知られています。「社会」とは、人と人の絆の豊かさで、コミュニティ、地域文化、伝統や芸能などが含まれます。それらを測る指標は、GDPのように簡単な数量にはならないので、これからの工夫が必要です。また、「環境」ですが、これは“街並み、里山、川、海”などのことですが、この良さを表す指標も新たに定義をする必要があります。

#### (2) 「環境容量」の定義

ところで、いま環境には、上のような“私たちの生活を取り巻く環境”という定義のほかに、その外側の“地球規模の環境”という定義があります。後者は、大規模すぎてその影響を実感するのは難しいですが、人間生存の基盤となるものです。具体的には、“地球規模の気候や生態系、加えて、石油や鉱物など天然資源など”であり、「人類共通の資本」ともいべきものです。その利用可能量を「地球資源と環境容量」と呼びます。いま人類の活動がこの許容量を大きく上回り、人類持続を危うくさせていることが今日の最大の問題となっています。

今回の見直しでは、「低炭素社会」や「生物多様性保全」といった新たな社会目標が国際的にも謳われるようになった世界の趨勢を受けて、「地球資源と環境容量」を制約とした中で、「新たな幸せ社会」のビジョンを作ることが求められます。

#### (3) 「幸せ」指標の特徴

ここでいう「幸せ指標」は、昔から豊かさ指標とか、幸福指標などという名前でのいろいろな議論がされてきました。これは、それぞれの地域、時代でそこに住む人々の価値観に基づいて、適切なものが独自に作られるものといえます。

たとえば、生存すら容易ではないアフリカ貧困地帯では、国連が「BHN（基礎

的人間要求)」という生きる上で最低限の条件（飲める水、屋根がある家など）を要素とする指標を作っています。また、ブータンの「GNH（国民総幸福指標）」は、いま世界が関心を持っていますが、それはブータンに特有の価値観（社会の絆などに加えて“信仰心”など）が大事な要素として取り入れられています。また、我が国でも一時期、「社会指標」とか「豊かさ指標」というものが提案されて、具体的に計算されたことがあります。このビジョンづくりの中でも、このような事例も参考にしながら淡路島固有の指標づくりをします。

## 2 指標の設定

「幸せ指標」は、「経済」、「社会」、「環境」の3つの側面を総合した指標ということになりますが、これを設定するには詳細な社会調査が必要になります。そこで当面は、3つの側面ごとに適切な複数の指標を選び、それぞれの指標の経年的な変化を観察することで地域社会の状態を把握し、ビジョンの実現状況をフォローアップしていくこととします。

## 3 総合的指標「幸せ指標」の導入

今後専門的な研究成果を見据えて、必要に応じて項目の追加・削除や、適切な評価手法の導入により、最終的に総合的指標である「幸せ指標」の設定をめざします。



<淡路地域ビジョン検討・見直しの実施状況>

	全体会	企画部会	専門委員会	夢会議	その他
平成 21 年度	2 回	5 回	—	1 回	—
平成 22 年度	—	4 回	2 回	2 回	—
平成 23 年度	1 回	5 回	3 回	1 回	※

※ 平成 23 年 7 月 22 日～8 月 11 日

「淡路地域ビジョン改訂に係る県民意見提出手続（パブリックコメント手続）実施

<参考文献>

- 武田信一（2003）『淡路島の古代・中世研究』神戸新聞総合出版センター  
 武田信一（2007）『南淡路の民俗』神戸新聞総合出版センター  
 金子熊夫、竹本和彦、松下和夫、加藤久和、森口裕一著、内藤正明、加藤三郎編集（1998）  
 『岩波講座 地球環境学<10>持続可能な社会システム』岩波書店

<挿絵提供>

- ・ 高月 紘（ペンネーム：ハイムーン（High Moon））  
 京（みやこ）エコロジーセンター館長、日本漫画家協会会員
- ・ NPO 法人 環境文明 21